

志田義秀著

越谷吾山

附  
吾山俳句集

越谷吾山翁記念事業會藏

## はしがき

近來方言研究の盛んになるにつれ、「物類稱呼」の著者吾山翁を景慕する者が多くなつた。然るに翁の傳記は從來判明せなかつた。一面深川巖巖寺や越ヶ谷天獄寺の墓碑の所在も不明であつた。因つて翁の宗家に當る會田家の當主會田利治郎及び同族の濱野吉之助に、方言研究關係から東條操並に大田榮太郎等が加はり、何か翁の爲め事蹟の顯彰をしたいものと考へた。この事を適々同町の町長有瀬七藏氏、天獄寺の住職榎本一成師に語つた處、この舉に賛同され、昭和八年八月に「越谷吾山翁記念事業會」なるものを越ヶ谷町役場内に設ける事になり、廣く同志を募つた。

然るに、その後濱野吉之助によつて從來不明とされてゐた墓碑も發見され、又同町久伊豆神社神官池田悅太郎氏方から短冊も發見された。一方志田義秀先生によつて追善集「もとの水」も現はれ、次で大田榮太郎によつて浦和町渡邊金造閣下所藏の尺牘一通も知られた。

茲に本會は協議の結果、句碑の建設と傳記句集の刊行を企て、猶十二月十六日達夜の辰を期して百五十回忌法會を營む事になつた。傳記句集は本會の爲め翁の俳歴等につき攷究された志田先

生の執筆を得た。茲に記して感謝の意を表する。

本會の事業に就いて寄附金を寄せられた越ヶ谷町及び各地の有志各位、殊に中村晴彦氏、瀧田克己氏、並に諸般の事務に労を執られた同町助役中村甚次郎氏、書記七星國久氏に對し、厚く謝意を表する。

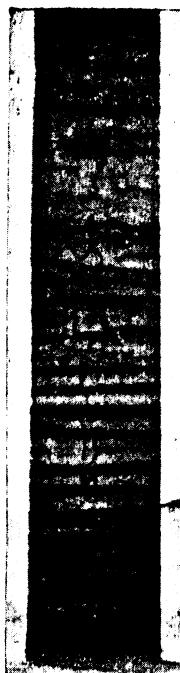
昭和九年十二月

越谷吾山翁記念事業會



(裁所水のとも) 像 肖 山 吾 谷 越

晉山真蹟短冊（俳句集參照）



（照參文本） 晉山墓

## 目 次

は し が き

卷頭

口 繪 插 繪

吾山肖像

卷頭

吾山短冊と墳墓

同

吾山點印句メ

三三

序

言

一 吾山の出自

三

二 吾山の江戸住

四

日 次

一

目 次

三	吾山の家庭	一八
四	吾山の俳歴	二七
五	吾山の著述	三九
六	吾山の周圍	四六
七	吾山の俳風	五九
結語		七一

附

吾山俳句集	一一〇
-------	-----

目 次 終

越

谷

吾

山

# 越谷吾山

志田義秀

## 序言

近世中期の古學復興期、俳諧狂歌川柳の復興期として花々しかつた時代、この時代に於ける特殊な存在であった越谷吾山は、是非研究せられねばならない人であるに拘らず、最近まで殆ど閑却せられて來た。日本方言研究書の嚆矢と云はれる『物類稱呼』の著者として、芭蕉句解の優れた書の一つ『笠葉』の著者として、詞寄の便利で優れた書の一つ『あすならふ』の著者として、吾山の名は記憶せられてゐるに相違ないが、而もその研究は一向着手されなかつたのである。併し又着手されなかつたのにも或理由が考へられないではないので、吾山の傳記方面にしても、吾山の門人であつた馬琴の彼此の著書によつて或程度の事が知られる位が精々で、それ以上始ど手

係りがないと云つてよい事情であつたからである。然るに最近方言研究の新氣運にもよつて、得易からぬ書であつた『物頽稱呼』が刊行されて、東條操氏が解題を與へられ、雑誌『方言』に關係ある大田栄太郎氏が、吾山の郷里越ヶ谷に資料を探訪してその調査を同誌上に發表され、越ヶ谷に於ても吾山の功績宣揚を發起されるに至つたので、吾山の研究が愈々本格に入るべき時節到来し、從來霧裡の人にも等しかつた吾山の相貌が漸く明らかられようとするに至つたのである。以下試みようとする私の敍述は、以上の兩氏の研究に負ふ所が多いが、方言學方面よりの究明は東條氏の勞を煩はす事とし、私の方は自然俳諧方面の事が主になるであらう事を御断りして置かねばならない。

## 一 吾山の出自

吾山の出自については、大田氏が採訪調査された資料を纏めて、『方言』誌上に「越谷吾山翁の位牌等發見に就いて雜感」と題して掲載されてゐるので、私が茲に體裁を整へる必要上叙述する出自は、氏の調査を轉載記録するが如き結果になるのである。唯極最近吾山の墓が發見されて、

同氏からその報告を得てゐるので、それ等をも併せて述べる事になるのである。

吾山が埼玉縣の越ヶ谷出身である事は、追善集その他あらゆるものゝ一致する所で契証する要はなく、それを姓としたことも間違ないのであるが、本姓が何であるか確実には知られなかつた『物類稱呼』や『<sup>寺社</sup>經緯』に秀眞の名を記してゐるから、名も知られてゐたのである。然るに一昨年越ヶ谷天獄寺(淨土宗)の靈名簿で、「會田文之助」とある名の下に「法橋院往舉吾山師竹居士」といふ戒名が發見され、この會田文之助といふのは、會田家の名主時代の世襲名で、その會田家は越ヶ谷の舊家である現會田利治郎氏家に相違なく——他にも會田家はあるが——それは同家に現に「法橋院往舉吾山師竹居士」とある位牌が懸存する事からさう考へられるとの事である。(靈名簿の戒名に「院」の字一字多いのは誤記と見られるのであらう)。尤も右の會田文之助と吾山との關係は判然しないのであるが、兎に角二人が同家たる關係であることは知られるのである。會田利治郎氏家は、戒名によると祖先が信濃國司海野庵流とあつて、家傳によると天正二年六月の頃、故あつて越ヶ谷に移り、後、會田と改姓したといふ事で、現當主まで判明してゐる世代のみでも十五代を経て居り、その間名主等を代々勤めてゐると云ふことである。唯その中吾山は幾代目の

時に當るかは判然せぬが、六代か七代頭であらうとの事である——右の靈名簿の事實發見者は、會田家の出で濱野家を相續された濱野吉之助氏であると云ふ——。兎に角右によつて吾山の本姓は會田氏であることが判明する譯である。

吾山の出生した頃の會田家は、越ヶ谷のどの邊であつたか。同家所藏の古文書にはいづれも越谷新町とあり、新町は今も俗稱として残つてゐるので、吾山當時も新町であつたらう事が推定されるとの事である。

吾山が會田家の嫡子であつたか嫡子以外であつたかを決定すべき資料はまだ出ないのであるが、いづれにしても吾山は家を離れて江戸に出たものゝやうで、會田家そのものは依然名主の家として越ヶ谷に續いたのである。併し吾山は生家と關係を絶つたのではないやうである。

吾山が歿した時會田家の菩提寺天獄寺に葬られたかどうかは今日まで確實には知られず、吾山の墓が天獄寺に發見もされなかつたのである。それに馬琴の『岡兩談』(吾山三回忌追善集)の吾山傳には「深川靈嚴寺に葬る」とあり、さうかと思ふと同人の『吾佛の記』の中では「深川なる靈嚴寺に葬るといふ」といふ如き言ひ振をしてゐるので、頗る不安を感じしめたのであつたが、こ

の程天獄寺に吾山の墓が發見されたのである。發見者はこの度も濱野吉之助氏であるといふが、天獄寺の墓地の一隅、適當に云へば、もと天獄寺の境内にあつた末寺舊法久院の墓地の隣、現神田久四郎氏の墓所に偶然發見されたのである。これは墓石が一時埋れたり位置が動いたりするに至つたのであるとの事であるが、墓石には、卷頭の寫真でも知られるやうに、正面に吾山の戒名を中央にその左右に浩譽妙清信女・柔戒智光信女の戒名があるのであるが、墓石の向つて左側面に三人の歿年月日が刻まれ、右側面に

寛保四子歳

宣戒童子

二月二十四日

と刻まれて居り、この墓石の右に並ぶ教界道立宣信士併刻の墓石の右側面にも浩譽妙清信女の歿年月日が刻まれてゐるとの事で（従つて併刻の二人はこの人の両親ではあるまいかとの事である）、是等によつて吾山以外の三人の歿年月日を記すと、

宣戒童子 寛保四子歳二月二十四日

（吾山二十八歳）

一 吾山の出自

柔戒智光信女 延享元子歳九月三日

(同 同 歲)

浩譽妙清信女 明和五子歳八月二十日

(吾山五十二歳)

の如くなるのであるが、この三人は吾山と妻子關係の人ではあるまいかと考へられる。そしてこの中始めの二人が同年に歿して「戒」の字を共通にしてゐる點や年代の見當などから考へて、多分吾山の先妻母子ではあるまいかと想像され、従つて最後の浩譽妙清信女は後妻ではあるまいかの見當になる。

然るに今度發見された墓は、吾山が歿した時建てられたものか或は後に營まれたものかが問題になるので、この點については確實な事が知られないとの事である。夫婦母子合刻といふ形になつてゐる點からいふと、吾山歿時に建てられたものとすべき可能が薄くなるやうであるが、併しきさうとして又、この墓以前に吾山の歿した時吾山一人の墓が天嶽寺に建てられたかどうか、依然問題となるのである。

吾山の一周年追善集『もとの水』によると、吾山の葬られた箇所を明記してゐないけれども、悼句の中墓を詠んだ句を見ると、越谷連にも江戸俳人にも見られ、これは吾山の墓が深川の靈巖

寺と越ヶ谷の天獄寺との兩所にあつたからであらうとも又越谷連が靈巖寺へ來つて詣でたのであらうともどちらとも解し得るので、推定の資料になりにくいと思はれるが、闌更の

一周忌のいとなみありける

吾山亡人の塚に詣るとて

めぐる日や雪の櫻に袖ぬるゝ 洛半花坊  
蘭更

とあるこの一周忌の管みのあつたといふ塚詣でを越ヶ谷と考へる事は餘程むづかしいことにならう。又立和の跋に、奥羽からの歸途越ヶ谷に立寄つて江戸へ急いだとある所に、越ヶ谷で墓詣でをした事を云つて居らず、又遺族中の一人のみを女の悼句に、

なき奇や深川ちどり友衛 みを  
(奇)

とあつて、深川千鳥がなき寄つたといふと、吾山の墓が深川靈巖寺にあることにならねばならぬやうに思はれる。以上の點から、吾山が靈巖寺に葬られた事は確實と見ねばならず、そしてその墓が一周忌頃には猶依然靈巖寺にあつた事も確實であり、馬琴の言ひ方は稍々曖昧であつたけれども、三回忌頃にも猶依然墓があつたものと見られる方が強いと云へる。されば天獄寺に吾山歿

時當時墓が建てられたかどうかは不明と云はねばならぬと共に、今度發見された墓はいつか後に  
營まれたものとすべき可能性のあるものと云はねばならない。

吾山の歿したのは、天明七年十二月十七日である事が確かに知られてゐたに拘らず、その享年  
が今日まで不思議に不確定のものとして残つてゐた。馬琴は『岡兩談』の吾山傳には「春秋七十  
一歳」と確かに云ひながら、『吾佛の記』の中では「年七十餘」と云ひ、同じく吾山門であつた馬  
琴の兄羅文の『岡兩談』序にも「七十餘歳」と云つてゐるので、結局不確定といふより外なかつ  
たのである。然るに一周忌追善集の『もとの水』に、

法橋往譽吾山師竹居士

天明七丁未歳十二月十七日沒 年七十一

の如き位牌形のものが掲載されてゐて、これに明かに「年七十一」と記してあり、猶春蟻の序にも「去年の師走十かあまりなぬかの日、ほし霜七十ぢ一にして、稱名の中に一句を残して、よも  
つ國人となられにける」とあるので、享年七十一歳であつた事は、もはや疑ふべき餘地がなくな

つたと云つてよい。餘事ながら云つて置くと、同じ天明七年には、天明俳壇の俳傑の一大島蓼太が七十歳で歿してゐて、吾山が蓼太に長すること一歳の違ひで同じ年に歿してゐるのは、偶然ながらにも偶然過ぎる感もあるのである。

さて享年が七十一歳と決定すると、吾山の出生したのは、歿年から逆算して享保二年に當るといふことを考へて置かねばならない。

## 二 吾山の江戸住

越ヶ谷は江戸とは餘り遠くない關係で、吾山は早くから江戸と交渉を持ち、屢々出府もしたらうと思はれる。俳諧方面の事實から考へて見ても、柳居に入門したのは可なり早いらしく、従つてこの方面的關係からも屢々出府したうと思はれる。はつきり知られる事實から云つても、芭蕉の五十回忌に當る寛保三年（吾山二十七歳）に、柳居が深川長慶寺の發句塚を再興した時にも吾山が出府した事が知られるが、その序でにあつたのか、柳居師弟四人に吾山も加つて、五人連で鎌倉光明寺の十夜詣に出掛けてゐる。併し吾山が愈々本當に江戸に移住したのは、不思議にも

存外遅いのである。俳諧集の中吾山に越ヶ谷の肩書の附いたものを見て行くと、寓目中の最も遅いものは、寶曆十四年の同門鳥醉の『わか松原』に見えるもので、

松原主人は道の兄にして、春の一夜は語りたらず、

明行まゝに

入る月の禮や解て海の音 越ヶ谷 吾山

とあるものが其れである。寶曆十四年は吾山の四十八歳の時に當り、五十歳に垂んとする時であるが、この頃越ヶ谷に在つて江戸に移住してはゐないのである。鳥醉はこの前年に品川駿洲の海晏寺門前に營まれた松原庵に入つたのであるから、右の句及び前書の様子から見ると、吾山が鳥醉の松原庵を訪づれて一夜語り明かしたものである事が知られ、かうした類の出府は屢々やつたに相違ないのであるが、まだ移住はしなかつたのである。

然るに明和七年の『誹諧鷺後篇』には、

古馗庵

馬喰町一丁目  
東よこ町

越谷吾山

の如く見えて居り、その後江戸居住の宗匠として常に見えるから、この頃までに江戸に移住した

ことは確かに、庵號をも古趙庵と云ひ、姓も曾田を名乗らずに郷里の越谷を名乗つたことも考へられるのである。明和七年は五十四歳で、前の寶曆十四年からは七年後に當り、即ち四十八歳から五十四歳までの間に江戸に移住定着したことになる。それなら、その七年間中のいつであつたのかと云ふと、明和五年秋の『諺諧鶴初編』には吾山が見えてゐないので、この點からいふと、この頃猶江戸に移住してゐなかつた爲めに加へられてゐないのであらうと考へられないではないので、多分さうなであらうと考へられて來るのである。若しさうとすれば、明和六年頃即ち五十三歳頃に移住した事になるので、これ程遅い移住であつたのである。移住の動機原因といふ如きものも明白には知られないが、茲に取敢へず注意に上るのは、前章に述べた天嶽寺幕面の明和五年八月二十日に歿してゐる浩譽妙清信女である。前に考へたやうにこの婦人が若し吾山の後妻であつたとしたら、この後妻の死が吾山の江戸移住決意に積極的にか關係を持つものゝ如く考へられて來るのである。これは固より想像ではある。想像ではあるが、浩譽妙清信女の歿した年の年末頃かその翌年頃かに吾山が江戸移住を決行してゐるとしたら、この年時上の際どい關係が右の想像を十分許すとせねばならないであらう。

兎に角吾山が五十の聲を聞く頃漸く江戸に移住したとなると、それまでは越ヶ谷に居住した事になるが、その間越ヶ谷で會田家とどんな關係を持ちどんな生活をしてゐたものがゞ頗る問題になつて來るのである。吾山の著書は凡て江戸移住後に出されてゐて、それ等は皆立派な著書であるが、是等の著書の成るべき素地述説は越ヶ谷居住時代に或程度まで或はその大部分が出來てゐたものと見られねばならぬのに、それを會田家との關係なり生活振なりから知り得る如き資料は一向に得られぬのである。『もとの水』の春蟻の序に、吾山が法橋になつた事について、  
さらに名利のためならず、百事はいかいに難て、世産の破りしをも、（中略）、せめてはおのが自恣ながらも、非俗非僧のけぢめみせんとの意なるべし。

と云つてゐる此の百事俳諧に擲つて世産を破つたと云ふ事が、越ヶ谷居住時代にまで溯り得る事のやうに考へられるのであるが、それが會田家とどんな關係に於ての事であつたのか。越ヶ谷居住時代に於ける家族及び生活の模様の確かに知られない事と共に、知るべき手係りがないのである。

吾山は江戸移住後幾度か居所を變へてゐる。前に引いた『説諺續後篇』に「馬喰町二丁」とあつ

たものは、移住當時からの所かと思はれるが、安永三年の寄居庵輝雄編の『かゞ見種』には「日本橋品川町河岸廻  
船問屋錢屋の隣」とあり、翌安永四年正月成の吾山の『物類稱呼』には「江都日本橋室坊」と記して居り、安永八年の吾山の『翌槍』にも同じく「江都日本橋室坊」と記して居り、馬琴の『吾佛の記』には天明元年頃の吾山の居所を駿河町としてゐる。右によれば、明和の末か安永の初め頃に馬喰町から品川町河岸へ轉住したものらしく、更に安永三年に室坊へ轉住したことが知られるが、室坊と駿河町とは同所を意味するのである。それは吾山の安永五年歲旦帳の『東海藻』の中に、

名月や富士見ゆるかと駿河町とは、ばせを翁の句なり。  
再吟して其街を過るに、ふと春興の句あり。幸  
にそこなる師竹菴にくる。

月の出ぬうちを臘や昏の富士 知來

といふものが見え、これで見ても室坊は駿河町の一部と考へられ、恐らく今三越のある室町邊で、室町を固くるしく室坊と書いたものかと思はれる（續俳家奇人談の寺町百菴の傳中に）は、「法橋吾山が室町の庵」とある。然るに『説

『諧鶴後篇』に見られる別號印に「涼華房」とあつて遊印に「江左風涼」とあり、江左風涼は居所によつて案じた語らしく、涼華房は江左風涼に關係を持つ別號らしいが、江左風涼の意味する居所は、吾山の當時の居所を見當として云へば馬喰町に當り、さうとすれば隅田川との關係に於て云ふものと考へられる。尤もこれは越ヶ谷居住時代に既に選ばれてゐたものではないかと考へられないではないが、それは知るべき由がない。兎に角これによつて吾山に涼華房といふ別號のあつた事を注意して置かねばならない。然るに、「もとの水」の菜陽の跋に、

生涯東都の肆を好み、珠流る河の名たゞる邊に棲て常に富峰を愛し、あるは戯場の傍にありてとよみ狂ひ脈はしき中に華晨月夕の樂觀想なすの趣は、是や市に隠るゝの洒落ならん。

とあつて、この中の「珠流る河の云々」は、珠流河町居住を洒落れてかう云つたものらしく、知來の句の前書中の芭蕉の句ででも知られるやうに、駿河町邊は富士觀望で有名な所であつたので、それで菜陽が「常に富峰を愛し」と云つてゐるものである事が知られるが、「戯場の傍にありて云々」は、今度大田氏を介して知つた渡邊刀水氏藏の吾山書簡によつて始めて明かにするを得たのであつた。同書簡は以下度々引用するであらうやうに、吾山研究上種々貴重な資料を含むもので

あるが、唯惜しいことは手摺れになつて殆ど文字を存しない箇所が可なり出来てゐる事である。

同書簡は署名宛名の部分を存しないが、簡末の日附が十二月廿一日と判讀されるやうであり、内容によつて天明三年のものである事が知られ、吾山が對顔しない新門人に送つた趣のものである。同書簡中にこの年春二月から秋まで名所古跡を巡り、吉野京洛等へも赴いたことを云ひ、歸江後不快中であることを云つた續きに、

駿術の庵打捨、戯場わたりに引籠龍在候。

と云つてゐるから、天明三年秋畿内旅行から歸庵後、駿河町を引拂つて堺町・辻屋町・木挽町いづれかの劇場附近へ轉住したことが知られるが、吾山の長男であつたかと思はれる貫四(後に述べる)に關する考察から、辻屋町であつたのではないかと考へられるのであるが、確かに云へない。それはいづれであつたにしても、菜陽の云つてゐた「戯場の傍にありて云々」はこれであつた事が知られるのである。そして吾山は恐らく最後までこゝに住しこゝで終焉を遂げたのであらう。

以上の如く吾山は、馬喰町から品川町河岸へ、それから駿河町宝坊へ、最後に劇場附近へと、少なくとも三度居を移したのであるが、この轉住の間に庵號をも變へてゐて、明和七年の『説諧

『鶴後篇』安永二年の『説謡鶴三編』翌年の『かゞ見種』には共に古船庵とあつて、馬喰町・品川町河岸居住までは古船庵を號してゐることが知られるが、安永三年の歲旦帳以後は師竹庵となつてゐるから、駿河町宝坊居住以後は師竹庵を號したのである。

### 三 吾山の家庭

前に述べた如く、今度發見された墓の戒名によつて、吾山の越ヶ谷居住時代に先妻及び後妻並にその一子があつたのではないかと考へたのであつたが、これは固より推定で、吾山の越ヶ谷居住時代の模様の判然しない如く判然とは知られないのである。唯江戸移住以後に於ける吾山の家庭及びそれに夤縁を持つ人々は『もとの水』によつて知られるので、それについて考へて見る外はないのである。

『もとの水』の最末に、前に掲げた吾山の枠づきの位牌形を掲げた次に、次の如く記されてゐる。

年忘れわすれがたなの父戀し 師竹庵中連  
六の華地蔵へ笠をおさめばや たよ

餅花もけふは佛へ手向艸  
衣配りそれにはあらぬ記念かな  
なき奇や深川ちどり友衛  
手向よとはやくも唉し梅椿  
篇もさゝなきしたり佛の日  
むかしく冬靈祭あつたとさ  
しら玉か露よりもろき寒椿  
記念とぞなりししきしの伊達紙衣  
煤はきの塵にも染まじ法の蓮  
丸頭巾見るにつけても泪かな  
法の橋とて寒聲も念佛かな  
ぢゝ様に似た尉見せよ破魔矢賣  
在し世の湯婆のゆかも我が泪

少  
梨  
津  
五  
溪  
子  
芳  
千  
介  
莊  
二  
八十  
少  
年  
鐵  
之  
助  
鳳  
山

大尾

三 香山の家庭

羽遣ひも寒きうき寢やはなれ鳥

沾梨

十徳の姿なつかし鉢たゝき

貫四

右の十七人が師竹庵中速と云はれる人々なのであるから、吾山の家庭の人及びそれに縁を持つ人達であることが知られる。特にその詠んでゐる句を見ると、よの女は「年忘れわすがたなの父戀し」と詠んでゐるのであるから、吾山の娘であることが知られ、従つてその次のたよ女から少女梨津女までの七人も同じく娘であらうと考へられる事にならう。尤もこの中には姪とか嫁とかいふ人もあるのではないかと考へられぬではないが、さういふ場合は何か肩書があるのが普通なので、それが省かれてゐるものと見ねばならぬが、肩書のない儘の形と最後の少女梨津女が大尼の沾梨女（これは後に述べるが）の腹らしい名である點とから考へると、凡て娘と考へる方が有力になるのである。この中、よの女とたよ女とは、吾山の安永三年の歳旦帳以來の歳旦帳に句が見えてゐるから、相當の年齢であることも知られ、女俳人と云ふべき人であるとも云へる。して見ると、吾山には生存した娘が八人もある事になり、その外に子息も幾人があるのであるから、吾山は中々の子福者であつた事が知られる譯である。そしてかう子福者であるのは、それが一腹で

はなくて前後幾人かの妻があつたからであらうと考へられるやうで、この點からも、前に述べたやうに、柔戒智光信女が早くの先妻で浩譽妙清信女は後妻と考へる事が相應する事になり、猶沾梨女は吾山江戸移住後の妻と考へられるので、斯く少くとも前後三人の妻があつたと考へられるのである。この點から、吾山の子女も三腹になり得るので、従つて子女の數の多いことも首肯され、又是等子女の中には右の越ヶ谷時代の先妻及び後妻の腹の子女もあり得ると見ねはならぬであらう。

子息と思はれる方を考へると、大尾の貫四が先づそれらしく、もと／＼『もとの水』は、春蟻の序に、「こたび辭世の一句を本尊として、貞婦孝子追善の集いとなまるゝにぞ（中略）、予漆膠の故ありてことにあづかりねれば」と云つてゐて、この「貞婦孝子」とは大尾に据つてゐる沾梨女、及び貫四を指すものと考へられ、沾梨女・貫四が企てゝ春蟻が後見して編纂した追善集である事が知られる（立和の跋によると、立和も補助）。そしてこの春蟻の序に貫四を「孝子」と云つてゐる上に、立和の跋にも、「追悼の句々贈られしをねもごろに集め小冊子となしぬる貫四の孝心を助せらるゝ春蟻うしの信に」とあるから、貫四が吾山の子息である事は疑なく、恐らく生存した子女

中の長男に當る人であつたかと考へられる。前に引いた吾山書簡に、畿内旅行を云つてゐる中に「ことに愚妻并老人の長男——引連登候」とあつて、この愚妻及び長男は沾梨女及び貢四と考へ得ると思ふから、沾梨女が吾山の妻であることが愈々確かであると共に貢四が吾山の長男であるべきことも愈々確かであると云つてよい。猶吾山の歳旦帳を見ると、貢四是安永三年の歳旦帳以後常に見え、吾山歿後の寛政二年の歳旦帳『東海藻』にも沾梨・鳳山・子芳・五溪と共に見えてゐて、是等の人達がこの頃猶存命であることが知られる。猶この貢四について、大田氏が丁度この頃の淨瑠璃作者である松貫四と同人か別人かに想到された。これは頗る興味ある研究問題で、私には同人らしく思はれるのではあるが、之を確實にすべき資料が得られない。松貫四是安永三年の肥前座興行の『鍔鉢駄六一代斬』を吉田伸二と合作してゐるのが初作らしく、翌年の外記座興行の名作『戀娘昔八丈』(吉田角)その他數作があつて、天明五年の結城座興行の名作『伽羅先代萩』(吉田角兵衛)まで名の見える作者で、通稱を萬屋吉右衛門と云ひ、葺屋町の人であつたと云ふ。然るに吾山は、前に述べた如く、畿内旅行から歸つて病氣になつて劇場附近に引籠つたのであるが、貢四が若し松貫四であるとすると、吾山の引籠つたのは松貫四の葺屋町の宅と

考へる事が一番尤もらしいものになつて來るのである。それに吾山は、歌舞伎なり淨瑠璃なりの方面と關係があつたらしく、劇場附近へ移つたのもそれに關係を持つものらしく思はれるので、それは吾山の天明五年の歳旦帳『東海藻』に白猿（五世團十郎）の句が見え、『もとの水』の悼句者の中に三升・柏蓮・薪水その他俳優と思はれる人々や河東・山彦など淨瑠璃太夫かその方面の人らしい人があるので、是等の點から考へて吾山は歌舞伎・淨瑠璃方面に直接或は間接に關係のあつたことが考へられるのである。斯くの如く吾山が歌舞伎・淨瑠璃方面に關係があつたと考へられる點から、吾山の長男の貫四が松貫四と同人であつたと考へる事がふさはしい事にもなつて來るのである。唯、今私には之を積極的に立證すべき資料が得られないでの、問題として研究を後日に俟つより外ない。

貫四については以上に止める事として、さて他の鳳山・子芳・五溪の三人も同様に吾山の子息と考へ得るかと思ふ。鳳山は天明二年の『東海藻』によつてもと尺素と云つたのが改號したのである事が知られるのであるが、尺素は安永三年の吾山歳旦帳に越谷として見え、安永十年の『東海藻』にもコシガヤとして見え、この前後の歳旦帳に常に見えることは勿論、天明二年以後は鳳

山として見え、寛政二年の『東海藻』にも見えるのである。特にこの人について注意を惹くのは越谷として見えることで、吾山の子でありながら越谷に留つたといふ事はどういふ關係になるのか、會田家なり母（後妻あたりか）の里なりとどんな關係に於てあつたものか、この邊が問題になるのであるが、之を知るべき手係りがない。兎に角こゝに吾山と會田家なり吾山の妻の家なりとの何等かの關係を物語るものがあるやうである。子芳は安永三年の歳旦帳及び同五年六年の『東海藻』には見えないで、安永十年の『東海藻』には見え、その後も引き続き見え、寛政二年の『東海藻』にも見える。この點から大體貫四や鳳山よりは弟なのではないかと考へられる。五溪は、安永六年の『東海藻』に五溪といふ號が見え、その後一向見えないで『もとの水』に見えるので、安永六年の五溪と『もとの水』の五溪とは別人ではあるまいかと疑はれる。特に寛政二年の『東海藻』では一本松（岩代國安達郡のであらう）として沾梨と共に見えてゐるので、當時沾梨と共に一本松に住つてゐたらしく、從つて元來沾梨の腹なのではあるまいかと思はれる。さうとすれば子芳よりは猶弟であつたかと思はれて來、兎に角安永六年の五溪と同人と見ることは餘程困難になつて來るので、暫く別人と見て置かねばなるまいかと思ふ。以上の如く見て來ると、貫四・鳳山・

子芳・五溪の四人は吾山の子息かと考へられるのであるが、千介・八十・莊二の三人は果してどうか。この三人は吾山の歳旦帳には更に見えず、名の様子も號ではなくて本名らしいから、恐らく吾山・貫四などの下僕なのではあるまいかと考へられる。追善集には能く下僕が加つてゐて、それには僕といふ肩書の附せられてゐるのが普通であるけれども『もとの水』は凡てこの種の肩書を附せない形式になつてゐるから、かう考へても一向差支ないのである。それから、少年鐵之助は、「ちゝ様に似た尉見せよ破塵矢賣」といふ句を詠んでゐるから、吾山の孫であることは明白で、従つて貫四・鳳山あたりか或はよの女・たよ女あたりかの子ではあるまいかと考へられるが、孫は猶この外にもあつたであらうのに、鐵之助一人しかないので、餘り多くなる事を避けたものか或は餘り幼少であつた爲めに加へなかつたものか、何かそんな事情であつたものであらう。

問題になるのは沾梨女である。沾梨女も吾山の歳旦帳に常に見えてゐて、特に重い位地が與へられ、貫四などよりもより重い位地が與へられてゐる。安永三年の歳旦帳には單に女沾梨とあるが、同五年の『東海藻』には師竹庵中沾梨とあり、同十年・天明二年・同三年の『東海藻』にも師竹庵中或は師竹庵中女とある。尤も『東海藻』中師竹庵中の肩書のないものもあるが、師竹庵中の肩

書のないのは單に省略されたに過ぎないものと考へられる。然るに庵中女といふ用語の慣例は妻とか妾とかを意味し、それに『もとの水』に見られる沾梨女の句が「羽遣ひも寒きうき寝やはなれ島」といふ句であるから、吾山の妻（正式内縁孰れであつたに拘らず）であつたことは確かであり、それに春蟻が「貞婦」と云つてゐるのであるから、貞女たる妻であつたらうことが考へられる。吾山の江戸移住後の妻であつたと考へられるが、それでも吾山の五十三歳頃以後その歿するまで十九年間ばかり連れ添つてゐる譯で、従つて『もとの水』に名を連ねる娘子息中の幾人かの母であり得るから、前にこの人の腹であらうと考へた梨津女や五溪の外、八人の娘中でも猶一人二人くらゐはあり得よう。それは兎に角として、沾梨といふ號によつて考へられる事は、沾梨が内田沾山と關係のある人ではないかといふ事と吾山と沾山との關係といふ事とである。この事は後に吾山と沾山との關係を述べる所に至つて更に考へる事とし、こゝには先づこれだけの事を云つて置かう。

吾山の家庭内の模様や生活振は能く知られないが、上來考へ來つたやうに吾山は前後少くとも三人の妻を持つたと考へられ、そしてその間に十人以上の子女を擧げたと見られるので、この點

からいふと吾山は子實には恵まれた人であつたと云へる。而も最後に得た妻が貞女であつたとすると、その内助の功もあつたであらうから、この點に於ても幸福であつたと云はねばならない。吾山自身も老いて益々壯んで、『物類稱呼』の如き大著を始め、刊行未刊に拘らず次々著述をなし得たり、晩年に至る程俳壇に對して高踏的態度を執つたに拘らず、依然渴仰者を持ち得て連年可なり大きな一派の年次句集とも云ふべき歲旦帳を出し得たり、その歿後に於ても、直ちに貞婦沾梨孝子貫四とよき友春蠟の助力等とによつて追善集として頗る整備した一周忌集が出されたりしてゐるのは、その根本は吾山の人格的學者の性格行實の然らしめたものには相違ないのであるが、同時に又幸福な家庭が營まれてゐた爲めにもよるらしく、又沾梨女の内助の功の興かる所もあつたのであらうと思はれる。

#### 四 吾山の俳歴

吾山は俳諧の方ではもと江戸の佐久間柳居の門人であつた。柳居は旗本俳人で、談林系統から洒落風に轉じた水間沾徳の門人であつたが、沾徳歿後享保十六年の『五色墨』運動に參加して洒

落風と絶ち、伊勢の中川乙由に入門して伊勢風に轉じたのであるから、柳居門であつた吾山は柳居流の伊勢風を以て出發した譯である。吾山が師を選ぶに當り、江戸俳人中でも氣骨ある柳居を師として選んだのは、吾山の人物から考へて偶然ではなかつたやうにも思はれる。吾山が柳居門に入つたのはいつであるかは確かに知られないが、吾山の作が柳居門の鳥辭の元文五年の『冬野あそび』や同年の鴻巣の俳人梅富の『稻筏』に見えるなどから見て、この頃以前の入門であることは確かである。(こゝに吾山と柳居との年齢關係を對比して見ると、元文五年は吾山二十四歳、柳居四十六歳で、吾山は柳居より二十三歳の年少に當り、吾山は二十四歳以前に柳居に入門した關係になる。柳居の歿年享年が普通延享五年五月二十九日歿又は三十日歿とされ、享年六十三歳とされてゐるが、これには誤があつて、鳥辭の柳居追善集の『五七記』によると、元祿八年の出生で享年が五十四歳になるのであり、歿日も五月三十日の方が正しいのである)。柳居の著述中で吾山の作の見える最も早いものは、柳居が寛保三年(吾山二十七歳)芭蕉五十回忌に深川長慶寺の發句塚を再興した時の『同光忌』で、猶前に述べた如く同年吾山が柳居師弟四人と鎌倉光明寺十夜詣と共にし、その時の紀行『安美院笠』に吾山の作が見えるのであるが、吾山が柳居の『同光

忌』の成つた時の事をその著『朱紫』の中に追憶して、

柳居先師むかしを忍ぶ涙の露の草葉を分けて古墳を再興なし給ふ。其日法筵に連りし門弟子を見わたされ、今日より又五十年を経て百年忌にあはむものは吾山一人なるべしと宣ひしが、いまや過こし昔を思へば、まのあたり見し人も數すくなく、判者には島醉なし。秋瓜も多英もともになくて、存命なるは門瑟・卷阿・霜後三千残れり。

と云つてゐる。これによつて吾山は柳居門中でも若年の方に屬する門人であつた事が知られるが、右の文中柳居の云つてゐる芭蕉百年忌は寛政五年に當り、吾山が柳居が豫見して云つた如くにこの年まで存命したとしたら、丁度喜壽の祝すべき年算に達したのであつたが、蹉跎し易い人生は吾山に僅かばかりの壽を籍さないで、吾山が寛政五年に先だつ事僅かに六年天明七年に歿してしまつたことは、誠に惜しむべき事であつた。

この後、柳居の歳旦帳や柳居門の同門の人々の諸集に吾山の作の見えることは、後部の吾山俳句集によつて窺はれるから、一々述べることは略するが、吾山は若年の方の門人であつたに拘らず、柳居門として早くから第一線に立つべき俳人中に位置し來つてゐる事は、特に留意さるべき

所である。

然るに柳居は延享五年に五十四歳で歿し、比較的早く逝いてしまつたので、當時三十二歳であつた吾山は、比較的早く師に別れ、師事して以來十年内外ぐらゐで師を失つたのである。柳居に死別した吾山はその後どうしたか。柳居の歿後も、同門のト史・秋瓜・鳥醉・門瑟・老梅等の歳旦帳や柳居追善集その他に寶曆十四年頃までも吾山の作が見えるのであるから、寶曆の末頃までは柳居の遺弟として柳居流を守つたものと思はれる。然るに次の明和年間から以後は柳門關係の集で吾山の作の見られるものは、安永九年の太初の柳居三十三回忌追善集の『閑古鳥』に見える一句が私に知られる唯一のもので、その他には更に見掛けないのである。この點から注意すべきものになるのは、馬琴が『吾佛の記』の中に記してゐる次の記事である。

越谷氏師竹庵法橋吾山（はじめ柳居の門人也。後に沾山に從ふて判者になれり。當時獨立、その家は駿河町にありき）

（當時とは天明元年馬琴の兄羅文の吾山入門の時を指してゐるのであるが、羅文の入門は同じ馬琴の羅文一周忌追善集『笠の露』にその前年に當る安永九年としてゐる方を正確とせねばならぬ。）

馬琴の云ふ所には常に前後齟齬する所があつて餘程注意を要するのであるが、元來吾山の門人であつた馬琴が、吾山が沾山に従つたと云つてゐる事實そのものは容易に疑ひ難いのである。特に後に述べるやうに吾山が明和頃には沾山側に屬してゐる事は事實でもあるから、馬琴の云ふ所は信じてよいものと思はれる。然るに馬琴は單に沾山と云つて一世沾山か二世沾山かを明かにしてゐないが、一世沾山は『説家大系圖』によると寶曆八年に歿して居り、吾山の方は上述のごとく寶曆の末頃までも柳門の遺弟たることを守つたらしく思はれるから、吾山が従つた沾山といふのは一世沾山でなければならぬ事になり、その時期は大體明和の始め頃あたりであるべき見當になる。然るにこゝで想起されて來るのは前に述べた沾梨女である。沾梨女は吾山が明和六年頃に江戸に移住した頃かその後間もない頃からの妻と考へられ、そして沾梨といふ號が沾山に關係のある號のやうに思はれるので、沾梨女は一世乃至二世沾山の血縁の人か門人かではなかつたかと想像され、それを二世沾山か沾山關係の人かと吾山に世話したのではないかの想像が成立つので、これが又吾山が沾山に従つたと云ふ事實を間接に立證する事柄となるであらう。

今吾山と二世沾山との關係及び吾山の江戸移住後の佛壇に於ける地位を見る爲めに、『説譜鯨』

に於ける吾山の現はれ方を検討して見よう。

『講諧鶴』は江戸點者の總覽書として明和五年以來數十篇續刊されてゐるが、既に述べた如く、吾山は明和五年の初編には見えて居らず明和七年の『講諧鶴後篇』から見えるのである。該後篇は其角座・一漁側・沾徳座・乾什側・宗因派・平砂側・獨立之徒の七派に分けられてゐて、吾山はこの中沾徳座に屬し、沾徳座は内田沾山(二世沾山)を筆頭に一世沾山門の故參高橋岱貝を次位にして都合十一人の人があつて、吾山はその中九人目に位置されてゐる。該書には卷頭に掲げる各派に註記が施されてゐて、沾徳座には、

合歡堂沾徳餘流、桂房沾山門總テ

一派。本座ニ云。其角座贈答アリ。

と註記してあつて、註記中「桂房沾山」といふのは玉桂房内田沾山即ち一世沾山(沾徳門)で、沾徳座は斯くの如く沾徳の餘流のみでなく一世沾山の門人をも含せたもので、特にその類觸を見ると二世沾山門及び一世沾山門が大多數で、その勢力が二世沾山にあるものなることが明かに知られる。然るに元來柳門で沾徳の餘流でもなければ一世沾山門でもない吾山が斯る沾徳座に屬してゐる。

圈二點長三、朱五、

飛瓈鑿

七、

五數龜繩

九、

仙固

問山炮

十、

榔串

加十五、



上ニ雀ヲ押テ

北五、



風東  
右弄花枝

吾山



るといふ事は頗る考へさせられる所で、この點から馬琴のいふ沾山(一世)に従つて判者となつたといふ事が首肯されて來ねばならないことになる。

該書によつて吾山の當時の庵號や住所の知られることは既に引いた通りであるが、その他吾山の加點の標準や加點の例句、點印及びその點數、所謂句メ等が知られ、その句メには關防・別號印・遊印が押されてゐて、その別號印に「涼華房」とあり遊印に「江左風涼」とあることも既に述べた所で、該書は吾山の是等の諸點の知られる唯一の資料である。因つて茲に點印・句メ等の見られる一面を掲出する。

關防は「一片束」と讀めるやうで、是が句メの「弄花枝」の花と關係を持つものゝやうであり、又「弄花枝」と別號印の「涼華房」と花を共通にする點に於て連絡を保つものゝやうであり、この「涼華房」と遊印の「江左風涼」と涼を共通にする點に於て同じく連絡を保つものゝやうで、要するに關防の語から遊印の語に至る四つの語は一連のものとして脈絡を保たしめてあるやうである。茲に吾山の用意ある趣向が窺はれよう。點の方は、圈點が二點、長點が三點、朱點が五點であるのは、他の俳人にも同様のものが見え、共通的なものに過ぎないが、點印を用ひる方は、

七點から十五點までは文字印のみで、七點が「玳瑁崖」、十點が「君山沱能」で、之に「神龜」の二字印を加へれば十五點、廿點は「巨鼈戴仙宮」の文字印を作つた蓬萊の畫印で、之に雙鶴の畫印を加へれば最高の廿五點となるものらしい。最高點を廿五點とすることは、他の點者でも普通の所で、廿五點以上の人には寧ろ少ない。兎に角七點から廿五點に至る點印が凡て蓬萊によつて概括されるものになつてゐる事は、吾山が考慮を廻らし趣向らしい。猶句メと號との文字は、凡例に本書の編纂法として明記してあるやうに吾山の眞蹟で、吾山の眞蹟の一を見得る點に於ても珍重すべきものである。

さて安永二年の『誹諧鷗三編』に於ても、吾山は沾徳座に屬して居り、該書の縮冊の如き性質を有する翌年の『かゞ見種』(同書を能く見ると、吾山の安永三年の歳旦帳中の江戸點者の顔觸及び順位を参考したと思はれる)に於ても、吾山は同様に沾徳座に屬してゐるが、『誹諧鷗五編』(年時不詳)に於ては、吾山は獨立に屬して居り、天明四年の『誹諧鷗七編』に於ては、吾山は獨立にも屬せず、吾山のこの頃の『東海藻』に常に名を並べ吾山門の客分格と考へられる宣我・茱陽・百壽・呼童の四人と共に無所屬のものとして全然別立せしめられて居り、天明六年の『誹諧鷗八編』

に於ては、吾山はやはり無所屬のものとして菜陽・百壽の二人と一團とされてゐて、呼童は獨立の中に加へられ、宣我はどこにも見えないのである。然るにこの年の吾山の『東海藻』の方では宣我・菜陽・百壽・呼童の四人が依然として相並んで名を連ねてゐるので、吾山の方と『誹諧艤五編』の編者の方との間に斯くの如き不一致な對照が見られるのである。而も『誹諧艤五編』以後、吾山が沾徳座を脱して獨立となり、猶その後外部からは獨立ともされないで全然無所屬の別格たる取扱を受けるに至つてゐる事は、却つて吾山の當時の佛壇に對する關係を如實に物語るもので、即ち吾山が當時の江戸點者一般の低級な態度に憮らず、彼等と齒することを愈々好まなくなり、學者として高く止るやうになつて來て、自己の勢力圏を或方面に狭く限るやうになり來つた事を意味するものでなければならない。それは吾山の歲旦帳に句を寄せてゐる點者が年を追うて愈々減じてゐる事や、後まで句を寄せてゐる點者の顔觸及びその人について考へられる人格や、吾山が諸侯に出入し知己を持つてゐたと共に門人に武士俳人の少なくなつた事などから、さう考へられるからである。

以上と共に、吾山について考へられねばならぬ事は、法橋に叙せられた事である。吾山が法橋

に叙せられた理山は『朱紫』の知足の序に、

人となりて詩にたくみに、わかの浦邊の遠きにわたり、つくばの道の高きをよびて、やがて詞の林に  
斧とる事をなむ常の業とせり。わけて諱諧のつらねうたにことに妙にして、世にどよめる事ひさしか  
りき。さればかけまくも賢き大御恵を豪ぶり奉りて、法の橋てふ位に昇る。實に此道にひでたりとい  
ふべし。

とあるによれば、漢詩・和歌・連歌特に俳諧に達してゐるといふ事がその理由をなしたらしいが、  
それも推舉する者がなければなり得ない筈で、恐らく吾山の關係ある諸侯中の有力者などの推舉  
によつたものであらう。そしてその叙せられた時期は、安永六年の『東海藻』まではまだ法橋と  
はなく、同八年の『翌槍』には既に法橋であるから、安永七年を中心とする三ヶ年間のいつかに  
叙せられたものであることが知られる。この中安永六年は吾山六十一歳に當り、即ち還暦を祝ふ  
べき年に當るので、これから考へると、或は恩寵ある諸侯などが吾山の還暦の祝賀を意義あらし  
めようとの意向から斡旋したものかとも考へられるのであるが、安永七年の『東海藻』を見得な  
い爲めに確かな事を知り得ないのは誠に遺憾である。

猶こゝに、以上に述べた點との關聯上、吾山の性格行跡について一言して置かうと思ふ。曩に述べた所によつて吾山の性格人物は略々知られる筈ではあるが、前に引いた『朱紫』の知足の序の冒頭に、

いまも世を金の門に避け、市なかに隠れたるものあり。

と云つて、吾山を金馬門に世を避け朝市に隠れる大隠に比してゐる。又前々章に引いた『もとの水』の菜陽の跋にも、或は之に倣つたものか同じく「是や市に隠るゝの洒落ならん」と云つてゐたが、猶之に續けて、

行狀のをかしき、操の正しき、實に嘆惜すべき翁なりけれ。

と云つてゐるので、その人物行跡の程も考へられよう。『もとの水』の序者春蟻の如きは、それは追善集なるが故の廉もあらうが、序に、

詩に詩仙のあり、歌に歌倦有、なんぞ俳諧のみ懲なからんや。仙とは道にこちつ作すぎて、心風雅の師たるべく、言葉滑稽の妙あらんにこそ。

と俳仙を定義し來つて、吾山が常に和漢の書見を怠らなかつた事を云つて、「さることはみな風雅

の羽翼たらしめんがため也。嗚呼風流の忠臣月華の孝子とやいはん」とたゞへ、吾山の歿した事を云つて、

あなをしむべきの俳仙なり。

と云つてゐるのである。事聊か哀惜の情の結果した過喪の嫌がないでもないが、兎に角斯くも云ひ得る斯くも見得るもののが吾山になくては、斯くいふ事は出来ないであらう。私は前に吾山が愈々高踏的獨善的態度を取るに至つたことを述べたが、吾山には狂歌の友があると共に自ら狂歌を嗜んだ事からも知られるやうに、性格的に「行狀のをかしき」所もあつたのであらうが、又「操の正しき」所があると共に人格の高い所があつて、その結果自然高踏的獨善的になつたものと考へられ、それが自然大隠的な風格とも俳仙的な操持とも云ひ得るものならしめたものと云ひ得よう。この點から云つて吾山は、當時の俳壇には稀な存在の一であつたと云ひ得る。

## 五 吾山の著述

吾山は創作家的態度よりも學者の態度を離れない俳人であつたらしい。それ故吾山の著には俳

諧集その他創作集は一つもなくて皆研究書ばかりである。尤も俳諧集と云ひ得るものに、連年出した可なり大きな年次句集ともいふべき歳旦帳、後には『東海藻』の名を以て連年出された歳旦帳があるが、これは兎に角歳旦帳で、普通にいふ俳諧集或は何等か創作集といふべきものは著されてゐないのである。これによつても知り得るやうに、吾山は常に學者の態度を持し、早くから研究に没頭したと考へられると共に後までも研究を續けたことが考へられる。知足は『朱紫』の序に、

もとより家とめりければ、からのやまととの文の巻々多に藏め貯へざるはなし。幼より夫が文このむ事、よの童べのひゝなをもてあそび或はこのみをめづるがことし。

と云つてゐる。これによると、富裕であつた曾田家には和漢の書類も多く、吾山は幼少から家庭的に讀書趣味を養はれたらしい。春蠅は『もとの水』の序に、

ことさへぐ唐ぶみにも、あし曳のやまとぶみにもこゝろを委て、蠅の憎むべき夏日のあつき、蚤蚊のやるせなき短夜さへ工案にふけり、あるは不韙手の藥もとむべき霜のあかつき、頬はれいたむ風のあしたもふみ見ることはわすれざりきとなん。

と云ひ、菜陽は『朱紫』の跋に、

此叟に一癖あり。几上にむかへば達識の佳句を收集し、驛旅の道行ぶりには野人の俚諺を棄損せず、花辰月夕は物かは常止に硯を鳴して輯錄の深切なること、たとへばおとこをふなの相見て後みやびふかくとゝのひ餘事を放下するにひとし。かうやうのすきものなりければ、櫻に涉獵せる冊子あまたあり、いまだ世にひろめざる腹稿は算えも盡せず。

と云つてゐて、是等によつても、吾山が如何に常に研究を怠らず、學者の態度を持続したかを知られるであらう。

吾山の著述として普く知られてゐるものは、安永四年（五十九歳）の『諸國方言物類稱呼』、同八年（六十三歳）の『俳諧翼檜』<sup>（新編）</sup>、天明四年（六十八歳）の『朱紫』の三書であらう。『物類稱呼』はその材料蒐集に如何に多くの年月と勞力を費したかを思はしめる大著で、日本方言研究書の嚆矢として劃期的な著であると共に、吾山の著述中でも主位を占めるものと云ひ得る。『翼檜』は所謂詞寄の書で、内題に「雅言俗語翼檜」とあり、凡例に「清語平話を記して文章附合等の便とす」とある如く、雅語俗語に涉つて各種の語を分類的に集め、主として俳諧制作の用に便じたもので、

吾山の造詣を思はしめるものであるが、略註も施されてて、詞寄の書としては頗る便利なものである所から、大に流布して後刷も度々出てゐるものである。『朱紫』は芭蕉の代表的な俳句の評釋と各方面に渉る雑説との二部から成つてゐる書で、これも吾山の造詣を思はしめるものであると共に、芭蕉の句の評釋に於ても「古池」の句に對する傾聽すべき説を始め傾聽すべき説が少なくてない。

以上三書の外に、吾山の著とすべきものに前にも述べた歳旦帳がある。歳旦帳は上來屬々引用したが、私の見得たものは安永三年のものが最も早く、それ以前のものを見得ない。これより以前のものもあるのであらうとは思ふが、まだ寓目し得ない。又連年出されたものとは思ふが、まだ見得ない部分があつて、安永三年以後のものでも、安永四年七八九年、天明四年（吾山の句のみは教示を得たが）同七年の以上六ヶ年のものを見得ないのは遺憾である。是等の歳旦帳は、早い頃は何と題號されたか、私の見た安永三年の歳旦帳には題簽が剥落してゐるので題號を知り得ないのであるが、安永五年の歳旦帳は『東海藻』と題號されて居り、これ以後のものも凡て『東海藻』と題號されてゐるので、遅くも安永五年以後の歳旦帳は『東海藻』と題號されたことが知

られ、吾山歿後の寛政二年の『東海藻』も見られるから、吾山歿後も一派によつて同じ題號で引き出されたことが知られるのである。

然るに、以上述べたものゝ外に、吾山の著として知られるものに猶『誹諧月と汐』・『誹諧本草』・『誹諧八集問答』の三書がある。然るに、この三書は、傳本の存することを聞かないので、果して板行されたものかどうかゞ問題になるのである。天明四年の『朱紫』奥附の書林山崎金兵衛の廣告によると、

誹諧月と汐

合卷

全壹冊

附錄、月の出入・潮の盈虛<sup>さしゆき</sup>國々の相違等を記す。兩面摺。

誹諧本草

近刻

此書は、芭蕉門四季の詞よせにして、古註の足らざるを補ひ、諸國祭禮法會等にあらたに註を加

へ、わかりがたき品類は圖をあらはし、正俗の文字を出し且ツあやまりを正したるものなり。

誹諧八集問答

全二冊

此書は、ばせを翁七部集・深川集合て八集の古註に新註を加へ、并哥仙發句を附錄に載せ、新刻仕候。

とあつて、これが三書を考へるに有力な手係りとなるのである。この廣告文によると、始めの『月と汐』は、附錄のものゝ内容を知り得るのみで、元本の方の内容は知らない。次の『誹諧本草』は、つまり俳諧歳時記と考へられるもので、吾山の門人の文筆・羅文・馬琴と金圖が繼承されて馬琴によつて大成された『俳諧歳時記』の直接の指針乃至粉本となつたものかと思はれるものである。最後の『八集問答』は、謂ふ所の八集の問答體の註釋書らしく、言はず吾山自身の『朱紫』を一層擴充擴大し、恐らく安永二年の索丸の『説叢大全』に對する補正が主要目的であつたものかと考へられるものである。然るに『月と汐』は、前に引用した天明三年の吾山草簡に、「此<sup>正カ</sup>月廿日頃までに月と汐集二冊朱紫二冊出板仕候可入<sup>御ガ</sup>案候」とあつて、『朱紫』と同時に出版される手告になつてゐた事が知られ、前掲の廣告文でもこの書のみが元本の内容の解説がなく、且「近刻」とも「新刻仕候」ともなく、「もとの水」中の菜陽の悼句に「望たりて今や師走の月と汐」とあるなどから考へると、手告通り『朱紫』と同時にか、兎に角天明四年中くらゐに出版されたものらしく考へられるが、傳本のあることを聞かないのは甚だ不思議である。『誹諧本草』は、前掲の廣告文に「近刻」とあるから、『朱紫』出版時にはまだ板行されなかつたことが知られ、『朱紫』中の

冬の部に「説叢に二三の瑕あり。予くはしく擧げて論す。是道を思ふが故也。秋冬の部未刻也」、見るべきの書也」と云つてゐるものは本書『説叢本草』を意味するものと推定され、「秋冬の部未刻也」と云つてゐるのは、句解のその部分が冬であるからで、事實は全部が未刻なのであつたらしく、それ故他の所に「餘は俳諧本草未刻に載たり。あはせ見るべし」とも云つてゐるものと考へられる。そしてこれがこの後板行されたかどうか、恐らくは結局未刊に了つたのであるまいかと想像される。『八集問答』は、前掲の廣告文に「新刻仕候」とあつて、これが前に引いた吾山書簡の文に「出板仕候」とあつたのと同じ類の用語法で新刻可仕候の意と解せられるから、當時猶未刊のものであつたことが知られ、そして『岡兩談』の吾山傳に吾山の終焉の時を叙して、「八集問答いまだ成らず、病苦をしのんで只是を思ふのみ、さらに他なし」とある所から見ると、この書は遂に未完成に了つたことは確かのやうである。八集の註釋となると、これは中々容易の業ではなく、流石の吾山にも未完成に了つたことは誠に己むを得ぬ所で、吾山自身にも臨終の心残りであつたことは至極尤もな事で、誠に惜しいことであつたと云はねばならない。

以上の如く考へて來ると、『月と汐』以下三種のものは、『月と汐』以外の二書は未刊乃至未完成

に了り、『月と汐』も存否不明に歸してゐることは遺憾な事である。前に引いた菜陽の文に、「いまだ世にひろめざる腹薬は算えも盡せず」と云つてゐたやうに、吾山には右の三書のみならず猶計畫されてゐたものがあつたのであらうと思はれるが、今日に見得るものは前に述べた『物類稱呼』等の三書と歳旦帳とに過ぎないのである。併し『物類稱呼』等三書のみを以てしても吾山は著述家として優秀な地位を占めることが出來、三書の斯界に齎らす恩賜は決して鮮少ではないのである。それと共に、刊行未刊に拘らず以上知り得た六種のものによつて云ふと、吾山の著述家としての本領は、創作家的な所よりも學者の所にあつて、それは國語學的研究を中権とする考證學的方面であると云ひ得よう。そしてその中、國語學的研究として未開拓の地に犁鋤を下したもののが方言研究で、それが『物類稱呼』の割期的な成果となつてゐるのである。

## 六 吾山の周囲

前にも一寸述べたやうに、吾山の周囲は年を追うて狭まつて行つてゐる。その代り不純な分子が次第に除かれて純潔化されて行つてゐる。それは連年出されてゐる吾山の歳旦帳を見れば明か

に知られる所であり、又一周忌追善集『もとの水』に見られる頬觸を見て考へられる所である。『もとの水』巻頭の追善脇起歌仙は、吾山に對して重い關係を持つ人が選ばれてゐる筈で、脇は序者の春蟻、舉句は跋者の立和であるが、連衆の中には和橋・都雲・米翁の如き諸侯俳人や羅文・文策・姑山・山帶の如き武士俳人などがあり、その他吾山門でも故參に屬する方の門人が見られる。是等は立和の外は皆吾山の歳旦帳に見える人々で、別に悼句も寄せてゐる。悼句中には、右の諸侯俳人の外に其阿上人もあつて、其阿も安永六年の歳旦帳に吾山居に訪れての歳旦暮吟の見られる人である。舊友には柳居門としての同門の門瑟・霜後や島聲門の島明なども見える。猶門人の地方關係を見ると、廣澤連・桐生連・千住連・艸加連・蒲生連・新田連・大澤連・越谷連があり、この中越谷連がやはり最も多數を占めてゐる。以上と共に、沾德座(沾山系)の點者の頗る少ないことが注意される。他は略するが、以上を以て見ても吾山の晩年の周圍が如何に狭まつて來てゐるかが知られようが、それと共に純潔化されて來てゐることも知られよう。

今吾山の門人及び知友中、いろんな意味で注意すべき多少の人々について考へて見よう。

右に挙げた四人の武士俳人は、その中の馬琴の兄羅文の外の三人は共に羅文の親友で、中でも

文策は羅文と特に親しく、安永十年の『東海藻』によつてその前年安永九年に吾山に入門したことが知られるから、吾山入門も羅文と共にであつたらう事が知られるのである。馬琴も天明三年の『東海藻』から句が見えるから、この前年あたりの入門らしく、『もとの水』にも、

消やすき硫黄の花や雪燈籠

馬琴

の悼句がある。羅文等四人の事や馬琴の事など、『曲亭遺稿』中の諸著によつて知り得る所があるが、姑く略して置く事とする。

『朱紫』や『もとの水』の跋を書き『もとの水』の校合者でもあつた墨鈍菜陽は、吾山とはどんな關係の人であつたか。(墨鈍は謙遜の意味の一號らしく、『朱紫』の雅印の一には脩竹とあり、『説諸艦六編』には鴨脚庵 堀菜陽とある) 『朱紫』の跋には吾山の事を「師熟むもふに」と云つてゐて、之を文字通りに考へて吾山の門人であつたと認めてよいと思はれるが、併し一種の跋の書き振を見ると、師弟といふよりも寧ろ同等の位地で物を云ふやうな書き振になつてゐるので、門人中でも別格の門人といふ如き人であつたと考へられ、又跋者として選ばれてゐるのみならず、二種の跋共に大字書きの眞蹟の儘が掲げられてゐるなどの點からも、さう考へられるのである。

『岡兩談』の吾山傳中に知足・菜陽について云つてゐる云ひ振から考へると、知足・菜陽共に富者であつたらしいので、何か身分のある富者であつたのではないかと考へられる。然るに俳諧の方から見ると、菜陽は米仲の『轂隨筆』(寶曆九)に四句見え、嘯山の『俳諧新選』(安永二)に江戸として二句見えてゐて、吾山の方のものでは、安永五年の『東海藻』から始めて見え、天明二年の『東海藻』からは餘程重い地位が與へられてゐる。以上の様子から考へると、菜陽は元來は米仲か米仲方面の誰かの門人で、それから吾山の方へ轉じたものらしく、それが身分ある富者で又人としても重んずるに足る所のある人であつたからなのか、比較的早く重い待遇が與へられたといふ關係になるものらしい。然るに、菜陽に似た關係に見える人が猶三人あつて、それは宣我・百壽・呼童であるが、この中、百壽(故園舎・崔齡舍 加藤百壽)は安永六年の『東海藻』から見え、宣我(在中菴 搞宣我)は安永十年の『東海藻』から見え、そして天明二年の『東海藻』からは是等二人と矣陽とが相並んで重い地位が與へられ、呼童(餘力菴 正木呼童)は早く旨原の『百歌仙』(寶曆二)に加つて居り、次で米仲の『轂隨筆』に見えるが、吾山との關係は他の三人より最も後れて天明三年の『東海藻』から始めて見えるのであるが、併しこの『東海藻』から以上四人が常に相並んでゐる。

で重い地位が與へられ、而もその中でも呼童が一番重い地位が與へられてゐる。これから考へると、呼童も俳歴上菜陽と同じやうな關係の人らしい。併し兎に角以上の四人は、その身分も同様のものらしく、従つて吾山に對する關係も同様のものとなつたものと考へられる。

然るに茲に不思議な問題が一つある。それは右の堀菜陽と略々同時代で全く同字の菜陽を名乗つてゐる江戸の脚本作者の壱越菜陽のある事である。雅名の菜陽が同字である上に、姓が堀と壱越(イチエイ)とで文字こそ違へ「ほり」を共通にし越の一字の有無を異にするのみである。(菜陽の姓の堀は、『訓説解』に記す姓の中には下略されたものがあるらしく考へられる點から、下略された類のものかとも考へられるが)併しこの二人は勿論同人ではなく、壱越菜陽は澤村二三次が寛延三年に澤村を壱越と改姓し明和八年に二三次を菜陽と改名したのであり、堀菜陽の方は寶曆九年の『勅隨筆』に既に菜陽で見えるから號としての使用は二三次の改名よりはずつと早いのである。又壱越菜陽は安永七年に歿してゐるが、堀菜陽の方は『もとの水』の出た天明八年には猶存命である。斯くの如く二人の菜陽は全然別人なのであるが、同じ時代に同じ江戸にゐながら壱越二三次が堀菜陽よりも後れて菜陽といふ同じ名を用ひ出したのはどういふ譯であらうか。これが不思議なのである。

ある。堀菜陽は大して名の通つた俳人でなかつた爲め知らずに偶合したのであらうか、或は菜陽は大して通つた號でないから知つてゐながら無斷借用してしまつたのであらうか（それなら壊越と堀との一語共通といふことが思ひつかせてさうさせたものであらう）、或は又姓が一語共通するからと云ふやうな事を理由として堀菜陽の快諾を求めて名乗らして貰つたものであらうか。以上の三様に考へられようが、この中のいづれが眞相であるかは解らないが、誠に不思議な事柄である。

吾山の門人で俳諧方面の著書のある人は、『俳諧歳時記』その他の著のある馬琴の外には殆ど知られてゐないが、『説諺鷲十三編』（寶政九）の奥附説書目中に、

### 百苑 香

江戸百評高點句  
吾山門人吼英撰

といふものが見える。この高點句集はどんなものでいつ板行されたものかは知られないが、撰者の吼英といふ人は、吾山の『東海藻』に常には見えぬが時々見えてゐる人である。安永五年の『東海藻』に向岡舎吼英として見え、その前に下谷連と肩書のある雲仙以下九人の人が並んでゐて、その前に「月暮に廻居する向岡舎の説席をこの鳳暦にあらためて師竹庵主の定會の別筵となし侍りていや榮えん事のいと嬉しく」といふ前書があるので、吼英は吾山門の下谷連の中心人物だ、

その宅の向岡舎が吾山を迎へて俳席を開く會席場となつてゐた事が知られる。この翌年の安永六年の『東海藻』には忍岡亭唄英とあつて、下谷連九人（齋鶴に出入がある）と共に同じく十人として見え、上掲の前書と略々似寄つた前書があるので、唄英の宅は向岡舎とも忍岡亭とも云つたことが知られる。兎に角唄英は斯くの如く吾山門の下谷俳人の中堅たる人であるから、高點句集の著などのあることも不思議ではない譯である。

『朱紫』の序を書いてゐる胸刺國藤知足といふ人は、「あが友師竹庵ぬしは」と云つてゐるから、吾山とは知友關係の人であつたことが知られるが、大田氏の調査によると、知足は『續俳家奇人談』に見える中村敲石のことであると云ふことで、現に後裔もあるとの事である。『續俳家奇人談』は俗書であるが、原編者竹内玄々一はもと吾山門であるから、同書中の越谷吾山傳や中村敲石傳の如きは略々確實なものと認め得る。同書の中村敲石傳によると、敲石は武州埼玉郡谷原村の里正中村太左衛門といふ人で、始め連歌を好み後俳諧に轉じて櫻川や百庵を友とし、號を敲石、庵を翁翁庵といつた。吾山が書を著す毎にこの人の校讎を乞うたといひ、敲石が師竹庵を訪うた時吾山が上座に請じて父兄の如くし、我が智の不足を補ふ恩人であると云つたといふ。著に賦物或

問・金花石葉集・俳諧原道等があるが知る人がない。天明八年七月に歿した。かうあるのである。この傳に知足と號したことは云つてないが、吾山の歳旦帳に谷原敲石、谷原知足の兩様で見えてゐるから、太左衛門が敲石とも知足とも號したことは略々疑ない。

又天明八年七月歿したといふことも、この年の十二月に成つてゐる『もとの水』に知足の悼句の見えないといふ事が一参考資料となるであらう。吾山の歳旦帳には毎年必ず見えてゐるが、安永六年の『東海藻』に、

松たてるいはれ問はゞや鶴と龜 八十二翁 知足

老足も老足によれ年の坂 同

の如く見え、この年八十二歳であつたとすると、天明八年歿した時には九十三歳に當り、即ちこれによつて吾山が九十三歳であつた事が知られる。さうとすると吾山よりは二十二歳の年長で、それに三種の著書もある程であるから、少なくとも可なりの造詣のあつた人で、吾山が校讎を乞うたり見事して敬つたりしたといふ事もあり得る事である。又天明三年の『東海藻』に、谷原御匂庵知足として見えるので、傳中に述べられてゐた庵號がこゝに見られ、之によつて御匂庵敲石が知足に相違ないことも確かめられる。さるにても『賦物或問』以下の著書が越ヶ谷邊で發見

されだと切望される。

知足は寺町百庵を友としたといふが、『續俳家奇人談』の寺町百庵傳には、「或時は法橋吾山が宝町の庵に北里の遊女を引連て共に食客たりしは、己が住所も定らぬ頃なるにや」といふ逸事を傳へてゐる。「吾山が宝町の庵」といふと、それは安永三年以後に當り、百庵の丁度八十歳以後に當るので（百庵の年齢等の事は後に述べる）、八十代を呼ぶ老翁が北里の遊女引連れ食客は、如何に畸人性に富む百庵であるにしても少し受取りがたく、食客といふ事はあり得る事としても、遊女引連れは以前の何かの混採ではあるまいかと疑はれるが、併し兎に角百庵と吾山とは可なり親しい知友關係であつたことは考へられる。年齢關係からいふと、百庵が知足よりも一歳年長に當るので、吾山と百庵との年齢關係は吾山の知足に於けると略々同様の關係になるのであるが、知足や吾山が百庵の如き一寸風變りの人と可なり親しい風交關係があつた事は、聊か意外の感がないではないが、併し要するにインテリ仲間といふ如き結びつきのものであつたのであらう。吾山の歳旦帳を見ると、安永三年の歳旦帳以來安永年間のもの——百庵の生存中に當るもの——には常に百庵の句が見えてゐるので、これからでも百庵と吾山との親しい關係が知られるのである。然るに吾

山の歳旦帳が意外にも百庵の歿年享年を決定すべき有力な資料となるので、こゝに意外な價値が生じて來るのである。『武江年表』には、安永六年の條に淺草觀音の姥石開帳の時に於ける百庵の狂歌を擧げてゐるが、百庵の歿時はどこにも記載されてなく、『名人忌辰錄』は何に據つたものか知らぬが寶曆十二年十月歿としてゐて、普通これが據られてゐるものゝやうであるが、『新撰俳諧年表』には寶曆十一年の歿の部に入れてある。然るに百庵の享年を記したものは一向に見掛けない。寶曆の歿でないことは以上によつても知られようし、彼此を引證するまでもなく吾山の歳旦帳が雄辯に物語るので、吾山の歳旦帳から行けば如何に早くても安永末年前の歿にはなり得ないのである。で、吾山の歳旦帳で見て行くと、百庵の句は安永十年（四月改元天明元年）の『東海藻』に、

煤掃ややうく遯て芥川 八十七翁  
百巻

として見えるのが最後で、この翌年の天明二年の『東海藻』からはふつに見えないのである。こゝに頗る有力な貴重な鍵が掴まれねばならぬのである。即ちこの事實から行けば、百庵は天明元年中に八十七歳で歿したものと見得る事になるので、これによつて、これまで誤謬不明であつた

百庵の歿年享年が明瞭になることになるのである。尤も天明二年以後に匂の見えてゐないのは、病患絶交その他何等かの事情によるのではないとの考へ方も出来るのであるから、以上だけの事實を以て直に以上の如く決定し去る事は許されないのであるが、併し少なくともこれによつて百庵が天明元年に八十七歳で猶存命であつた事を知り得る以上に、天明元年中に八十七歳で歿したと假定する事は十分出来ると云ひ得るのである。猶これの傍證となるべきもの一つを云ひ添へるならば、安永八年に山口來雪が素堂を襲名した披露の集『連俳睦百韻』の百庵の序に「淺草不二山人 百菴道阿八十五耄翁」と自記してゐるので、これによつても、これから三年後に當る天明元年の『東海藻』に八十七翁とある事の正確なことを知り得るであらう。

百庵は相當知られてゐる人であるから、多くいふを要しないであらうが、以上だけで何等の輪廓をも與へないのもどうかと思はれるから、多少の事を云ひ添へて置かう。寺町三知即ち百庵は、その生れた時を逆算すると、不思議にも吾山の師柳居の生れたと同じ年の元祿八年に當る。幕府の表坊主として、早くから和歌連歌俳諧を學び、造詣も相當にあり、職掌柄特に本草方面の研究を得意としたやうに見える。上役の奥坊主の成島道筑とは駒が合つたらしいが、同じ奥坊主の望

月三英は百庵をよく云はない。『三英隨筆』には百庵を「無學にてどら者也」と云つてゐる。成る程百庵はどら者といふ風はあるにはあるが、無學といふのはどの程度で云へる事か、兎に角言ひ過である。百庵が無闇と居所を替へ一生に數百庵替へるのを樂として號を百庵としたのだと云ふのも『三英隨筆』の云ふ所なので、果してさうなのかと疑はれもある。百庵自らその『林藪餘談』に云ふ所によると、寛保元年（四十七歳）の冬、御連歌御連衆を願つたのに、過失があつて勑所を轉ぜられ、翌年から鼓樓の時守となつて十五年間に及び、寶曆六年に買闇の身となり、明和八年（七十七歳）には全く退隱の身となつたと云ふが、かういふ處に本來どら者の風があつて愈々どら者の傾向となつたらしい事が窺はれるやうである。俳諧の方は元來が洒落風系統らしいが、藏前連中の集や素堂系統の葛飾派の集などにもその作が散見し、その風交は可なり廣かつたらしい。尤も素堂の方とは親族で、四十歳過ぎあたりの頃に素堂の孫素安から素堂を襲名せよと勧められたが辭したと彼自身云つてゐる（『連俳臆百韻』序）。これには自ら顧る所もあつたのであらうが又百庵の人柄も出でるやうである。百庵の作中では、晚得の『古事記布偶路』（寛政三）に、「百庵は去るものなり」と云つて、

相應に片付く道や雪女

〔体裁整然と白氏の文に依るもの〕

ぼたもちの黄粉のかたや女郎花

十五夜に出し月かも十三夜

〔旨原の『百首仙』にあつて、て長い前書きのもの〕

の三句を擧げて、「是等は人よく知る處なり」と云つてゐる如く、是等の三句は百庵の代表作の如くなり來つてゐるのであるが、本當は青蘋の『諸公畫贊』(享保十一年刊)に見える

初午やはつかに鷦の麥畠

月花や梅津かつらの若葉川

などや、「俳諧古選」に載せる

馬士の輪に騎りもどす霞哉

などの方が優つてゐる。著書も可なりあるやうで、普通に知られてゐる彼の宗艦研究の『狂句鑑賞』(明和八年頃刊か)や俳諧雜評を中心とした『林藪餘談』(享保元年刊)などの外、彼の得意とする本草物の『蕨薇考』『楓考』の如きがあり、外に猶『筆の秋』『歌林記識編』『短尺板屋抄』『歌囊井蛙談』『燧袋花鶯談』などいふものがあるやうである。是等から云つても、三英の云ふやうに

無學などとは到底云ひ難く、特に吾山（恐らくは知足も）の如き人が風交を續けてゐるといふ點からでもそれが考へられよう。

以上之外、猶云ふべき人もないではないが、今は姑く以上に止めて、最後に『もとの水』の春蠅の序に、

此師の門には、言語文學才長きひとおほかるに、

と云つてゐる言葉が、吾山門を能く云ひ表はした言葉である事を云つて置かう。

## 七 吾山の俳風

吾山は、俳諧に於ては、俳歴の所で述べたやうに、初め柳居門で、柳居歿後二世沾山に歸し、後獨立し、晩年には獨立派とさへ見られず無所屬と見られる程になつてゐる。吾山が師事した頃の柳居は平話體の伊勢風になつてゐたのであるから、吾山は先づ伊勢風を以て出發したことになる。然るに二世沾山の方は、一世沾山が洒落風の沾德門で、洒落風は元來平話體とは反対に謎語的な傾を持つものであつたが、併し二世沾山の頃は、洒落風及び洒落風から派生した諸派でも、

一般に平話體に近い傾を取りつゝあつたのであるから、吾山が二世沾山に歸したと云つても、俳風を全然變じたことにはならないのである。それと共に考へられる事は、吾山が二世沾山に歸したのは、馬琴が「沾山に従ふて判者となれり」と云つてゐる如く、立机して點者となる必要からであつたかと思はれるが、併し俳系關係から考へて、柳居は伊勢風に轉じない前は沾德門で一世沾山と同門であつたのであるから、吾山が二世沾山に歸したのは、同じ沾德系統であるといふ關係が關係してゐるやうに思はれる。兎に角吾山の俳風を考へるには、吾山が柳居派から二世沾山派へ移つたと云つてもそれは直に俳風を變じたことにはならないと云ふ事を頭に置いて考へねばならぬのである。

今吾山の俳風を見ようとするに當り、やはり年代を追うて考察する方が適當かと思ふが、作數が多く得られない爲め十分な事は云ひ難いが、兎に角年代を追ふ方法を取つて見よう。(「吾山俳句集」の方と參照を乞ふ)。

吾山の作として見られる最も早いものは、元文五年(吾山二十四歳)の『冬野あそび』と『稻筏』とに見られるものであるが、『稻筏』の方には吾山の作中でも特に得難い連句の一つを見得るので、

吾山早期の連句の模様を知り得ることは誠に幸である。この連句は、吾山の同門で先輩の鳥醉が同門の武藏鴻巢の梅富を訪うた時に巻かれた短歌行の式のもので、十二人の十二吟二巡のものになつて居り、越ヶ谷俳人で加つてゐるのは吾山と澁石とである。この短歌行の風調は勿論當時の伊勢風の風調と見られるものであるが、之を法式上から見ると、いづれ鳥醉が捌いたものであらうが、裏の花の座が一句前へ引上げられてゐるだけで、他の定座は法式通りになつて居り、季の句數なども法式通りで、短歌行の法式を成るべく守つたものになつてゐる。定座を受持つてゐる人を見ると、澁石が裏の月の座を承つてゐるに對して吾山が名残の表の月の座を承つてゐるので、これから見て越ヶ谷俳人中の吾山や澁石の當時の柳居門に於ける地位が決して低いものでなかつたらう事が窺はれる。二巡で二句宛附け出してゐる中、吾山が裏の四句目を附けて、秋三句を受けて雑に轉じて、

立歩は光り足らぬ小道ひ　吾山

の句を出してゐるが、附としても一句立としてもよい方のものではあるまいかと思はれる。今一句の名残の表の月の座を附けてゐる

## 隱居とは蔽を一重の月と闇。吾山

の句は、雑の句を受けて月の句を出したのであるが、この方は私には附としても稍々親し過ぎないか又一句立としても稍々巧み過ぎないかと思はれるのであるが、併しそれだけ巧みな句であるとも云へよう。一體短歌行は急場用のものには都合がよいが、表四句名残の裏四句といふ如き窮屈な所のあるもので、一巻の變化の模様取には都合のわるいものらしいが、この巻もその爲めか一巻の變化に稍々乏しい感があり、又當時の俳壇一面の共通的傾向にもよつて一體に附肌が稍々親し過ぎる感があるやうであるが、併し一句立としても面白い句があり、巻としても當時のものに能く見られる卑俗な所がなく、當時の伊勢風の作としては出来のよい方のものかと思はれる。そして之に加つてゐる吾山の技倆も連衆の他の人々には劣らぬと云へようと思ふ。

同時に見られる俳句は、

卯の華にわたして散や白つゝじ 吾山

相引や螢は草に明の星 同

の二句で、一は白拂蘭が白色を卯の花に渡す趣向、一は螢と曉星とに相引を考へた趣向で、やは

り當時の伊勢派一般に見られる理知的なもので、この二句だけではまだ彼此は云ひ難いと思ふ。

これから四年後の寛保三年の柳居の『同光忌』に、吾山の加つてゐる十二吟の歌仙首尾吟が見られるが、その風調は大體前に述べた『稻筏』の連句と變らぬと云つてよからう。俳句の方は、この集に見えるもの以下柳居の歿する寛延年間のものまで二十句足らずのものが見られるが、この期間のものは、大體から云つて理知的傾向は脱せずながらにも、さまで技巧的な所がなく、素直な表現のものが多い。その中、寛延二年の『はつ便』に見える

吹れ来て 潟につかへる千鳥哉 越谷 吾山

の句は、私には吾山一代の傑作の一であらうと思はれる。即ちこの句の如きは、師柳居の鉗喝指導がよい効果を見せてゐる方の部類のものと云へよう。

次の寶曆期の俳句は六句しか得られてゐないが、六句だけで見ると、技巧的になり、その爲晦澁にならうとする傾があつて、この頃吾山は方向に迷ひ出してゐるのではないかといふ氣がする。

明和八年の『四季發句牒』以後のものは、吾山の江戸移住以後に屬し、又二度活山に歸した以後のものになるが、明和期のものは『四季發句牒』の四句の外見られないので、確かな事は云へぬ

けれども、この四句だけで見ると、寶曆期のものに比べては技巧的であることが減じ、落着が見えて來、洗煉されて行かうとする方向のものと云ひ得る。四句の中の

名月や聲は寂しき長堤 吾山

の句は、千那の「高燈籠晝は物うき柱かな」の句を聯想させるもので、この千那の句の情趣には及ばず穿ちを免れぬものにはなつてゐるけれども、強ひて技巧を弄しない所に取柄がある。

川中に舟は着けりほとゝぎす 吾山

の句は、素直な寫生的な句で、四句中最も優れたものと思はれるが、「川中に」は川中の洲を云ふのであらうから、それを單に「川中に」と表現しては無理を免れぬので、この點に惜しむべき所がある。

次の安永期からは、吾山の歳旦帳が見られる爲めに比較的多くの作が見られる。その中でも、特に安永三年の歳旦帳には安永二年の句集略の十四句が繙つて見られたり、他に猶三句の俳句が見られたり、六章の三ツ物が見られたりして、吾山の作風を知るには最も好都合である。然るに同歳旦帳の作を見ると、素直な何もないではないが、それは寧ろ稀になつて來て、再び技巧的な

傾を取つて來、理知的な傾向が増して行くやうに見える。三ツ物に於てもそれが窺はれるが、句  
集略の十四句に於ても同様で、その中、

納涼

葵ひとつしらぬもやすしすゞみ舟

吾山

の句の如きは、「もとの水」にも選ばれてゐて、吾山の代表作の一とされてゐる譯であるが、この  
句は、表現は素直に出来てゐるけれども、通俗向の月並句といふべきものである。これよりも、

品河海裏禪寺にて

こがらしの樹々にはこぶや海の音

吾山

遊魚游亭（前書を略する）

山茶花の聲うごく日ざし哉

同

などの句の方が寧ろ優つてゐる作であるが、前の句は「こがらしの」の「の」（主格的用法）が持  
格と混雜する問題の用法になつてゐる點に於て完全とは云へず、後の句は「聲うごく」が句の中  
心生命でありながらねばりになつてゐて厭味を感じしめる。然るに別な三句中の

七 吾山の俳風

## 静さや年のゆうべの雲の脚

吾山

の句は、大三十日の夕べの慌しい中にも、世にかづらはぬ人（吾山自身の如き人）の世事に煩はされぬ姿態が、理知に訴へる事なしに巧みに的確に擒まれてゐて、吾山作中の傑作の一といふに憚らぬ作である。（單に「年」と云つても使ひ様では行く年の意になり、「年の夕べ」は除夜を「年の夜」といふのを傍かした語であるから、俳句的表現として少しも無理のない語であると云へる）。

安永年間のこの後の句を見ても、前述の傾向は依然として變りはなく、天明期に入つてもそれが同様であると云へる。『續俳家奇人談』の吾山傳に擧げる飲中八仙の句は、その年代が知られてゐないが、作の風調から擬すると安永の早い頃あたりとしてふさはしいもので、技巧の比較的薄いものになつてゐる。飲中八仙と云ふ如き詠みにくいものを前も夏に季を揃へて詠んだものであらから、技巧的接排に陥り易い代り、作者の技倅の見せ所になるもので、それが相當巧みに詠みこなされてゐると云へる。天明期のものに入つて見ると、天明三年の『東海藻』の

やぶ入や宿はづかしの森近き

師竹庵  
吾山

の句は、もとの水戸や『岡雨談』にも選ばれ、馬琴が猶『燕石襍志』の鍛入の項中にも引いてゐ

るものであるが、句の質から云へば前の「藝ひとつ」の納涼の句と同種類のものである。又、

青柳や堤づたひのむら時雨　吾山

の句は、「堤づたひの」が人（作者自身）ならば、有りふれた境地ながら一顧の價値あるものとなるが、「の」が人とも村時雨とも取れる疑問の用法のものになつてゐるのが惜しむべき點である。是等よりも、天明四年の『東海藻』の

梅が香やほそどのをねる沓の音　吾山

店門をうらへまはれば柳かな　同

などの句の方が、境地は浅いながらに率直に叙せられてゐるだけに取柄がある。同じ年の『朱紫』附錄に吾山自身が選び載せてゐる

初鶴や雲の嶮岨のとれて後　吾山

の句は、『岡兩談』にも選んでゐるものであるが、吾山自身にもこの句を特に選び載せるには理由があつたのであらうと思はれる。柳居に

時鳥脊腹の嶮岨おもしろし　柳居

七 吾山の俳風

といふ句があつて、柳居のこの句は、柳居の一周年忌追善集『三景集』(鳥醉・秋瓜・門瑟共編。寛延二年刊)に「先師病中枕上の吟」であるからと云つて、鳥醉以下四十九人の門人が脇起の五十韻を巻いて居り、同じく追善集『五七記』にも病床吟の獲鱗の一句として擧げてゐるもので、吾山の右の句は柳居のこの句から換骨奪胎したものであらうと考へられる。即ち柳居の句は、時鳥の背の方腹の方の山の嶮岨を詠み、時鳥が冥土の鳥とも云はれる所から、死後の死出の山を思ひやつたものであらうのを、吾山は山の嶮岨を雲の嶮しさへ轉用してこの句を成したのに相違なく、而も之を『朱紫』に特に選んだのは、暗に舊師を思ひやる意向を仄かす爲めであつたらうと考へられる。茲に吾山の舊師に對する床しい情が波まれると共に、句そのものとしては好句とはなし難いものながら、而も立派に獨立の存在價値を有すべきものになつてゐる。

『もとの水』にも『岡兩談』にも擧げてゐる吾山の辭世句、

## 辭世

花と見し雪はきのふぞもとの水

吾山

の句は、芭蕉が越人へ送つた「一人見し雪は今年も降りけるか」の句を聯想させるものであるが

勿論句の内容意義は異なつてゐて、吾山の終焉の句としてふさはしいものである。

以上に挙げたもの以外の天明期の作には、特に立取てゝ云はねばならぬ程の事はない。又『もとの水』に吾山一代の代表作として四季二十四句を選び載せてゐるが、是等の中の或物は既に以上に述べ來つてゐるので、最早多く云ふべき程のものはない。唯その中猶一句、見落し難い句として、

一 倍 蟻 を 捨 け り 御 破 川 吾 山

の句のあることを云つて置かねばならない。この句は『因兩談』にも選んでゐるものであるが、この句を見て想起されるのは、享保十八年の柳居等五家の『百番句合』の中なる、蓮之の

蚊 も 蟻 も み な つ き 流 せ 御 破 川 蓮 之

といふ句である。『百番句合』は同じ柳居等五家の『五色墨』運動の延長と見られるもので、吾山が必ず見てゐたに相違ないものであるから、吾山の右の句はこの蓮之の句から意識的にか無意識的にか胎生されてゐるものに相違ないのであるが、而も吾山の句は實事的な句境に轉換されてゐるから、獨立の價値を具備するのみならず、句の價値に於ても數等立ち勝つたものになつてゐる

七 吾山の俳風

ので、私はこの句も吾山作中の傑作の一と認むべきものと思ふのである。

以上見て來た吾山の作中には、古句乃至先人の作から脱化し或は暗示されたかと思はれるものがあつたが、斯る事は同時代の燕村その他にも幾らも見られる事で、要はその句の獨立的價値如何にあるのであるから、別に彼此いふには當らないのである。

吾山の作については、以上に止めても差支あるまい。要するに吾山は伊勢風の風調を以て終始したと云つて差支ないのである。唯その遺作を多く集め得ない爲めに、より多くの佳作を見出しえないことを遺憾とする。猶吾山には創作として多少の狂歌・俳文・漢詩の如きがあるが、是等については特更に云ふべき程の要はないであらう。以上の外、吾山の安永三年の歳旦帳に、吾山が前年の秋冬に加點した卷中から百句を選んだ高點抜句集が附録されて居り、「誹諧鶴」數編の中にも吾山が加點した高點句が掲げられてゐて、是等によつて點者としての吾山の加點の標準及び特色等が窺はれるのであるが、吾山に限らず一體に當時の點者に點取俳諧として寄せられたものは低級なものが多いので、斯る卷の加點を専門とした點者の場合は格別とし、本領が他にある吾山の如き人の場合に於ては、吾山にも時代の趨勢に漏れず斯る職業的の一面もあるにはあつたと

見るに止めて、多く云爲するだけの要はあるまいと思ふ。

## 結語

前章に於て、遺作の少ない吾山の作中に於ても、少なくとも、

吹かれ來て籠につかへる千鳥哉

(『もとの水』には、初句が「狂ひ來て」となつてゐて、これが後に推敲された形かとも思はれるが、猶この初案の方が優るかと思はれる)。

静かさや年の夕べの雲の脚

一ふくろ蠅を捨てけり御秋川

の三句は、吾山一代の作中の傑作と認め得ようといふ事を述べた。この點について吾山の爲めに云つて見れば、芭蕉が凡兆に語つて、

一世のうちに秀逸の句三五句あらん人は誹者也。十句におよばん人は名人なり。

と云ひ(『誹謗問答』)、又芭蕉が自分に會心に思はれる句を記しとめる『笈の小文』<sup>こぶみ</sup>といふ集を作

つてゐて、去來に去來の名月の句も入集したと語り、去來が私の句でその選に入るべきものがどれ程あるかと問うた時、芭蕉が、

なんぢ過分のことを云へり。すべて我この度の集にゑらみいれん句五句もちたるものはまれなり。  
と云つたといふが（同上）、芭蕉が前の言葉に云つてゐる「誹者」とは眞に俳人たる資格ある人の謂であらうから、この點から云へば吾山も亦俳者と云はるべき資格を持ち得ると云つてよからう。  
ともあれ吾山には後世に示すに足る俳句が數句出来てゐるので、この點から云へば吾山が俳諧に携つたことは必ずしも無意味に了つてゐないと云はなければならない。併しながら、吾山を全體として眺めてその本領と認むべきものを求めるとなると、本領とすべきものは、俳諧よりも寧ろ學者の方面にあるとせねばならぬであらう。そしてこれが吾山に俳諧の方の遺作がその俳歴と高齢との割には少なく、歳旦帳以外に自他の俳諧集が一も編まれてゐない主因とも考へられるであらう。この點から云へば、吾山の俳諧はその本領に對して寧ろ餘技的な意味を持つと云へる。  
門人であつた馬琴の吾山に對して云ふ所には、前後撞着する所があつて頗る斟酌を要するが、馬琴は『岡兩談』の吾山傳に於て、

實に蕉翁の再生とやいはん。後世蕉翁なき事を憂事なけれ。

と云つてゐる。この言葉は、追善集なるが故のものとして勿論斟酌を要するが、遙か後の文政元年に越後の鈴木牧之（『北越筆譜』の著者）に送つた書簡中には、

萬太は近來の俳諧師也、しかれども學力うすし。吾山は學力相應にあり、しかれども發句も附合も下手也。乍レ併この兩老は近來肩を比るものあらずと覺候。

と云つてゐる。これも亦兩老の歿後三十二年といふ如き時に地方在住の人へ私信として云ひ送つたものであるから、それだけの斟酌を以て見ねばならぬものである上、言葉が簡に過ぎて盡さない所があるけれども、兎に角驕傲な馬琴が吾山と蓼太とを比較して吾山に學力相應を認めた事は、大に味ふべき所でなければならぬであらう。斯く馬琴も吾山に學力を認めてゐる如く、吾山は學者を以て許され得るものを持つ上、方言研究に於ては當時の學界に獨歩するものであつたのである。要するに吾山は、人として人格的な人であり、學者として考證學的方面に大を以て許さるべき、傍ら俳人として無意義に了つてゐないといふ所に、吾山の全面貌が窺はれるのであらうと思ふ。



冬野あそび（白井鳥醉撰。元文五年刊）

卯の華にわたして散や白つゝじ

越谷吾山

稻筏（春漸亭梅富撰。元文五年刊）

短哥行

松風も青みを散らす田植哉

鳥醉

鷺

も蓑毛を振ふ入梅晴

鳥醉

一流の草鞋が家中はびこりて

鳥醉

斧

を手ン手にかつぐ木樵日

鳥醉

ウ  
あれほどな嵐に月を取残し

鳥醉

有難けれど通夜の下

冷洗石

鳥醉

姥栗を伽になぐさむ子共達

鳥醉

壹歩<sup>(分)</sup>

は光り足らぬ小遣ひ

鳥醉

秋 狐  
鳥 舞  
水 南  
柳 緑

ふたりたてゝ馬もあちらへ鈴鹿越  
花曇りやらたらゞ曇るやら  
年頃も同じ茶摘の娶くらべ  
二夕日ならこちら朝日は川向ひ  
染屋の上手ほめる鳶  
祭はいつも淀の若殿  
臂者よりは素麺好の名が高く  
おどけ交りの状の早書  
達戸忌も尻のすはらぬいそがしさ  
加減違ふてこれはあつ風呂  
隠居とは蔽を一重の月と闇  
出かはりも律儀を藝に中立  
ウ  
こはぐながら柿に木のぼり

舞鳥山石光秋富醉

鉢に倦てはならぬ恵心寺

豆腐屋の聲は花散る荷ひ賣

面白いほど笠の淡雪

○

相引や螢は草に明の星

芭蕉翁

同光忌(芭蕉五十回  
忌追善集)

佐久間柳居編。寛保三年刊)上

○  
捨香

うぐひすの子もしほらしや手向経

越ヶ谷

吾山

○

出門何處見

おもしろや八巾なき里の鳶の舞

竹涼

松葉かく子に桜散り添へ

翠紅

吾山俳句集

三

湯入衆の馳走に残る雪見せて  
ぬいてとりたい柱一本  
早稻過て中稻の月も刈こまれ  
野さへ染たにそちが前垂  
ウめつきりと三軒茶屋も鮎もさび  
薬の爛をたのむ乗物  
静とは古銅買も見おぼえて  
網戸の經に惚てたゞすむ  
柳にも一むれ花もとまり鳥  
雛をしまふた跡も夕榮へ  
亭雨聲豆花香千霜石施作成午鶴

安美陀笠

(佐久間柳居著。寛保三年刊)

鎌倉の十夜詣を思ひたつ。(下略)

古川藥師

この寺の人參ふとし大根引

六郷茶良茶

なら茶屋も招く庭あり花八ツ手

源氏明神

水鳥や四方へばつと汐手水

餓鬼

水懶の花さかぬ身や菰かぶり

其後は光明寺にこもる。參詣の老若男女いく同音に  
御名を唱れば、山井の浪も是に響きをそへ、十四夜  
の月百八の燈火かゞやきあふて、並居たる人の面も  
金色となれり。ひとへに蓮華臺上に遊ぶが如し。

音楽にちるや十夜の霜の花

吾山俳句集

甲子歲旦（佐久間柳居撰。寛保四年歲旦帳）

お通流

小町から流や汲みてはつ硯

題餅搗 優者

餅の日をおぼえてや友遠方より

乙丑歲旦（佐久間柳居撰。延享二年歲旦帳）

笠袋

大ぶくやいつを出る日の茶つみ笠

藤塙菜螺

終はさすに及ばじ菜螺茶屋

星合の橋守（假）（白井鳥聲撰。延享三年刊）

朝顔も合點で唉や奈良の町  
朝寒に伊達の薄着のとんぼ哉

丁卯歳旦（佐久間柳居撰。延享四年歳旦帳）

鳥追やうそふき歩（あり）行（ゆく）嫁（めぐみ）々が供  
懸乞やすまぬ顔して潤り酒

俳諧琵琶（翠紅撰。延享四年刊）

ひとへでも寒さ負せぬ椿かな

はつ便（麥斗庵ト史撰。寛延二年刊）

吹れ来て瀧につかへる千鳥哉

越谷吾山

寛延四年未年歳旦帖（吉川秋瓜撰）

大鳥居

笠木にはまだ閑を見て去年ことし

小川

御祓する小川も今や厄ばらひ

影をちこち（吉川秋瓜撰。寶曆元年刊）

とんぼうや塵吹よせて中に喫

癸酉歳旦（白井鳥醉撰。寶曆三年歳旦帳）

紅梅や車の膝に照合せ

乙亥歳旦（小宮山門桂撰。寶曆五年歳旦帳）

島の來て一筋長き柳かな 越谷吾山

丙子歲旦(小宮山門瑟撰。寶曆六年歲旦帳)

若水や暦の巻葉開く時

俳夜燈(柳居十三回  
忌追善集 富山亭老梅編。寶曆十年刊)

花散て物いふ木くや青あらし

越谷吾山

わか松原(白井鳥醉撰。寶曆十四年刊)

松原主人  
松原主人  
を庵鳥  
す。指

松原主人は道の兄にして、春の一夜は語りたらず、  
明行まゝに

入る月の朧や解て海の音

越ヶ谷吾山

四季發句牒

(芙蓉散人雪成編。明和八年刊?)

小夜更て雨に骨ある柳かな  
川中に舟は着けりほとゝぎす  
名月や晝は寂しき長堤  
水鳥にこと問ひやすし汐がしら

甲午春帖

(越谷吾山撰。安永三年歲旦帳)

君の恩高しきぼしのきぞ初  
一枝づゝに日の昇る梅  
うぐひすは樵夫の道を教へ来て

蓬萊や孫子は毬のかぞへうた  
つむ年玉もいざ寶舟

吾山砂 大賀吾山長

やがて咲花の都の使來て

露女

御代いはふ門に松たつあした哉

燕波

居蘇の名にくむ霞也けり

橿枝

徒口を轉る人やもゝ千鳥

吾山

門松よ萬々歳の今朝の色

橿枝

嘉例かゝさぬはつ空の鶴

燕波

こゝかしこあまたの小田を耕して

吾山

○

門並やこゝも住吉松のはる  
かすむ陌に冬わすれ艸  
遠乗の蹄にひばり飛たちて

吾山 芦郷

喰 摘 や さ も 蓬 菜 の 産 所

旭 の 蓋 を ひ ら く 若 水 吾 山

さ ほ ひ め の 裸 を 玉 と 舉 ら れ て

梅 枝

組合軸

み よ し の や 是 も 奥 あ る 花 の 数 春

吾 山 大 賀

七 種 ぐ さ も 舌 う ち の

吾 山

煤 掃 や 洗 ひ 頬 な る く れ の 月

吾 山 師 竹 庵

○ う ぐ ひ す の 餌 に 笠 着 そ め た り 申 月

吾 山

静 さ や 年 の ゆ ふ べ の 雲 の 脚

吾 山

癸巳  
安永二年  
前年

附錄

癸巳句集略

六句を賀して

はつ花や凡むそちの日の手柄

雉子

鄙びたる聲や都の野の雉子  
蛙

ある時は水のうへ踏むかはづ哉

萬句興行の席にて

定るやこゝろも鷹の繼尾より

艶詞

倡家桃李樹　花發競光輝  
以是佳人意　飛來襲我衣

櫻

雲とみる空にも名所山ざくら  
櫻に題して雑髪の句をこひける人にをくる

櫻さくころや髪(たぶき)にわかれ霜  
様菜花

山吹や色に奢らずしだれ咲  
やよひ下旬萬句雅薙にて

實(げ)や花卯月も待たでころもがえ  
納涼

藝ひとつしらぬもやすしすゞみ舟

良夜

名月やこゝろに旅の日本橋

再案

小野氏が人の心の花に對して

海晏禪寺  
鳥聲の建  
立せる柳  
塔松の供養  
あり。塚

野に置ぬ人のこゝろや庭の菊  
品河海晏禪寺にて

こがらしの樹々にはこぶや海の音

遊魚遊亭

隱士八十とせ餘り、世利を長男にゆづりて、ひたすらに俳諧をたしめり。されば此室は市聲の塵を雉堞に避けて、庭の一ト樹もをのづからあるじをしり顔なり。

山茶花の唇うごく日さし哉

七十齡賀

七くさの若葉めづらし年の内

句集略記終

東海藻（越谷吾山撰、安永五年歲旦帳）

この草に誰もあやかれ福壽相、  
行年のひと夜や明の星迎  
しだれたを揃へて暮す柳かな  
煤掃や梢にしらぬ朝嵐

年内立春

本哥としのうちにあかり障子のこそぐりを

はるとやいわんはらぬとやいはん

本哥—古  
り標れとし  
記とて本頭歌の今  
の取歌の今

東海藻（越谷吾山撰。安永六年歳旦帳）

世の花を妨るはじめや門の松  
鐘も聲かれたり昏の年の市  
梅は日を眠らぬ華や夜もすがら

浦島とあちらこちらぞ若くく

あけて嬉しきあら玉手箱

閑古鳥

(柳居三十三回忌追善集 涉無庵太初編。安永九年刊)

見定るうちに飛けりかんこ鳥

安永十年  
年。明  
四月改年  
元元

東海藻

(越谷吾山撰。安永十年歳旦帳)

門松や我が養老の瀧の音  
年なみをしらでそこに歟あじろ守  
欲に手はつかはぬ野なりはつ若菜  
わせ智恵の是にもありて梅の花  
鶯のさし湖向て初音かな

法橋吾山

東海藻（越谷吾山撰。天明三年歲旦帳）

穂に穂見る人の顔なり筋藻

へうたんて鰐ことしも又暮ぬ

雪解や残るものには峯の月

うぐひすや聲のひゞきのさゞら波

荒海を來て音もなし春の風

ほのぐらきうちの東や梅のはな

法橋吾

山

東海藻（越谷吾山撰。天明三年歲旦帳）上

逢ふて見て近まさりなり花の春

もゝ尻の客ぶりさても師走かな

やぶ入や宿はづかしの森近き

若草や四五日風を辻らかし

法橋吾

師竹庵吾

山

青柳や堤づたひのむら時雨

○

歳暮

つごもりかつもごりかいさしはすとて

うへをしたへとかへすせはしさ

東海藻(越谷晋山撰。天明四年歳旦帳)

きのふをばとくわすれけり花の春  
引眉(のか)口遊女ことしも暮にけり  
氣をとめて眼に見るものや春の風  
梅が香やほそどのをねる杏の晉  
唐門をうらへまはれば柳かな

法橋晋山

師竹庵

朱紫（越谷吾山著。天明四年刊）

初雁や雲の嶮岨のとれて後

東海藻（越谷吾山撰。天明五年歳旦帳）

法橋吾山

門松やおもへば去年のわすれ艸  
煤はきや箔屋の塵も世間並  
曙や閣を研出す梅の花  
青柳やすぐりたてたる春の色  
鶯や舌に塵なき朝日かけ  
はつ午や二日の月の一筆繪  
鳴く中を何おもひてや飛蛙

龜戸臥龍梅

いにしへの淵は此田歟梅の花

師竹庵吾山

東海藻（越谷吾山撰。天明六年歳旦帳）

櫻戸をとくくひらけけふは春法橋吾山

いせへ詣る人を送りて

この雪に格(つも)の名とりや年籠  
行くて化粧田見たり若菜摘

俳諧古文庫（瀧澤馬琴編。天明七年成）

福祿壽辭奉レ祝ニ何某侯還  
脣御賀辭也

いづれの御代の人にや、福祿壽といへる、さまかたち殊におかしき人いませ  
かりける。やまともろこしの公界に片折戸して、月花の詠に枕を安うする住  
家をもきかず。繪にうつし木に彫ては、やがて馴親みたる心地ぞする。げ  
にや明行く春の朝、ちよをことぶくねぎごとのためしにうたはるゝよりみれ

ば、まのあたりなる人にこそあらめ。高位に昇り富る壇に至るも、翁のいさ  
をしにあなれば、此人やこの徳や、虚實のさかひにしるべしていまぞかるぞ、  
風雅の道のあるじともいはめ。高きも賦きも壽福身に足らん事こそあらまほ  
しけれ。しかはあれど、世にめで興ずる言種の中にも、圍碁を見て斧の柄に  
年こしを覺し昔語は、七世のやしはごに相みしとかや。こしかた行すゑの事  
どもいかに問かはしけんかし。三千とせになるてふ桃園の主も、誰かれとむ  
つみけむきかまほし。水の江の翁の蓬がしまに古郷をなつかしみけるこそ、  
誠にさもありたき事なれ。なべて天地と久しきをあらそひ、霞を飲み松の實  
を食ひ、かりにもをうなをちかづけざるは、無下に興なきに似たらんとか。

されば松の(翁)夫婦と現じ、竹の千世の子を生す。鶴のもう聲にうたひ、龜  
の汀に群り集りて、煤とり餅搗のわざより、屏蘇くひつみの節會行れ、おのが  
さまぐに菜花を極ぬらんもをかし。いでや限りなき世のことわざを風流の  
道に調せば、尊貴ある此君は、福祿をあらがねのつちのまめなるになぞらへ、

詩算を久かたの大空にたとへて、虚實の間に幾春秋の詠をもうつし、月花の折にふれては、前驅後從のいさましきにかしづかれ、目出たき壽域に逍遙し給はゞ、まさにいはゆる福祿壽聖ならんものか。そもそも福祿はこの君の姓乎。祿壽は此君の御名か。鄙人の名づくべき所にあらねば、大君に奉りて賀壽のねぎごとにかかる事しかり。あなかしこ。

### い　く　は　る　の　年　の　環　や　六　十　圖



#### 送<sub>ニ</sub>羅文子辭

かひのくにゝうつり住給ふ羅文子に別るゝにのぞんで、母御の事など申出侍りて

にしき織る野もふりかへれはゝそかけ



#### としの暮によめる

つかこ  
もり  
三漢(天明海)

つごもりかつもごりかいさ師走とて  
うへを下へとかへすせはしさ

もとの水(吾山一周忌追善集 貫四編・春蠶後見。天明八年刊)

辭世

華と見し雪はきのふぞもとの水

○

吉師竹菴吾山發句拾遺

穂に穂見る人の貌なり飴薺  
うぐひすや舌に塵なき(あさほらけ)朝朗  
梅は口を眠らぬ華や夜もすがら  
青柳やすぐり立たる春の色  
蔽入や宿はづかしの森近き  
明海入明海五漢(天東)漢や永海を一  
青柳(天東)梅は日を天明海す  
三漢(天東)漢や五漢(天東)漢や一  
蔽

川中  
季發  
四句  
體。

藝  
帖。甲  
牛。春

水 ひとへうちのもの也  
奥 深き山のこゝろや遅ざくら  
川 中に船は着けりほとゝぎす  
灌 佛や日もさし汐の波間より  
藝 ひとつ知らぬは安し涼船  
白 雨やおくれてかさす月の暁  
荒 海を湧あがりてや雲の峰  
一 倍 蝦を捨けり御秋川  
舜 の葉越しの華や三日の月  
寢 よき夜となり兎星の枕より  
秋 風のよけて通すや角力取  
初 沙や底にしづまる芦の聲  
忘 れたる文字や跡から雁ひとつ

狂ひ來て。  
はつ便。

帆  
水。申  
春帖。

帆を出る雲よせつけぬ紅葉哉  
狂ひ来て瀧につかへる千鳥かな  
河豚汁や寐た極樂に春の夢  
我戀は明るぞ嬉しう夜の雪  
煤掃や洗ひ貌なる昏の月  
とし波や潮さし引の魚の棚

罔兩談

(吾山三四回  
忌追善集  
瀧澤馬琴著。寛政元年成)

秋風の  
水。

秋風のよけて通すや角力取

先師臨終まへの年にや有けん、この句扇にかゝんとて筆とりしより、老病俄におだ  
やかならず、それより眼あしく病重して、諸事ものうるさしとて、其後は發句もき  
こへざりしが、是等をや秋の風の發句と申べけれ。

○  
師云、予むかし先師柳居の間に侍る、むくげの句を

もて師にうかゞふ。

堺　日の論やはらげてむくげ哉

柳居子笑てよく似たることあり。愚老が先年申侍りし堺日の論にくろまぬむくげ哉。此句汝に得さすべしとて給へり。論にくろまぬ、一句のてには感涙に絶(堪)へず。てにはのあつかい是にてしるべしと申されき。

○

歳旦はせまくして古人にもすくなし。いつの春にか  
有けん。

きのふをばとく忘れけり花の春

蓼太

いつの間にとく來ていたよ花の春

師と蓼太は面會せざる人にして、しかも志しを同じうす。同年の歳旦割符を合せた  
るがごとし。師もおかしがられき。

○

藪入や宿はづかしの森ちかき

吾山俳句集

二七

歳  
と明海入と見は集  
の三漢やあれ  
水。(天東明海を  
藻ば一  
四漢ば一  
いつの間  
と蓼太間  
も天東。朝に匂に

一ふくろもとの  
水よき夜と  
水もとの

一ふくろ蠅を捨けり御秋川  
寐よき夜と成けり星の枕より  
初雁や雲の嶮岨のとれて後

醉  
江

花と見し

ほ  
きの水も  
ぐと  
の

戲子名所圖會（瀧澤馬琴著。寛政十二年刊）

花と見し雪はきのふぞもとの水  
子名所圖會（滝澤馬琴著。寛政十二年刊）

師竹廬  
吾山

續俳家奇人談（竹内玄々一遺著。天保三年刊）

一年の歳旦に

出る日の旅のころもや初がすみ

天  
古地二  
吉地  
云々  
文々  
春  
代光  
者一  
之者一  
春  
李  
李夜真  
萬夫  
李夜真  
誤と之陰逆

句柄いと優に丈たかし。此は文選に、天地萬代之遊旅、日月萬代之過客といへるに

なれり。

菊

斗公の歳に歳  
見登人帳山人  
が人見登人帳山人  
未なるし幾幾  
詳。ん貴て久久菊且吾

○

菊斗公より飲中八仙のほくを乞たまへるに、詠じ上  
るとて

智 章 鞍壺のねぶりさますや苔清水  
汝陽王 日の道や涎もあつき車うし  
左 相 千金の冰室やせめて舌の味  
宗 之 炎天を我物がほのはちすか  
蘇 晋 如意拂子蠅もさはらず蚊もさゝず  
李 白 いたづらに舟をまたせて涼み床  
張 旭 夕立や筆をふるひし雲の色  
焦 途 市中の人をまどふや蟬の聲

○

始め行脚して、美濃の國福島の關をこゆるに、何な  
るものぞと守る人の尋ねに、俳諧師なるよし答ふ。  
さらら(衍カ)ば一詠を證して通るべしといふ。折か  
ら時鳥のなけば

我とてもゆるさぬ關やほとゝぎす

○

世を辭する吟

花と見し雪はきのふぞ木の水

眞蹟短冊(埼玉縣越ヶ谷町久伊豆神社藏大田茶太郎氏紹介)

ひとつるベ水のひかるやけさの秋

吾山

花もと見し  
もと見し  
水。岡兩  
談。ひとつ  
べーこの  
句、眞蹟  
のまゝ、  
昭和九年  
に越ヶ谷  
にて句  
せしに越  
て建碑  
る。設と町  
の年

吾山俳句集 終

昭和九年十二月十日印 刷  
昭和九年十二月十六日發 行 非賣品

著者 志田義秀

誠谷吾山翁記念事業會代表  
埼玉縣南埼玉郡越ヶ谷町四六五三番地

發行者 會田利治郎  
東京市牛込區改代町二四番地

印刷者

松村

保

發行所 埼玉縣越ヶ谷役場內  
越谷吾山翁記念事業會

(行印社想理)